早稲田文學パンフレット

山口剛著

江戸文學と都市生活

春秋社

始

515-95

山口剛 著

江戸文學と都市生活

春秋社

大正
12.12.28
内交

序

一、この稿もと雜誌早稲田文學の囑のまゝに、大正十二年七月號及九月號に亘りて載せたるもの、今またこの「パンフレット」の體裁にかなふほどに增補しつ。

二、この稿を草する、まづいかにせば、最勞せずして、江戸文學と都會生活との關係の密度を示し得るかを考へ、さて、正風の俳諧と洒落本の通との二點間に一線をひきなせり。これ以上の最短距離なしと信じたるを以てなり。故に都會生活の本質を說かず、また俳諧の本質を說かずして、たゞ表面の事象による。或は一篇の戲文といふが當らん。

三、この稿を以て「パンフレット」の囑に應ずるもの、聊われに因緣あればなり。わがこの稿を駒形の蝸牛居にものして筆偶江戸の火災に及ぶや、獨語していふ。燒けるぞと。その獨語讖をなして、九月一日すべては灰燼に歸しぬ。辛うじて身を以て逃れ、難を上野の山に避く。その前後見る所、大方江戸時代の火災の記錄を讀むが如し。しかもその後

標目

一、江戸文學は都會文學なり。芭蕉の俳諧はおのづから、その埒外にあり。

二、芭蕉の俳諧と其角の俳諧との差は、田園生活と都會生活の差を示す。

三、秋成は、その著去年の枝折に於て芭蕉の行脚の無意味なるをいふ。彼も都會の人なればなり。

四、其角の俳諧は都會本位の談林と通ずる所あり。故に正風と行歩を一にせず。

五、江戸坐は正風の江戸化し、都會化したるもの、抱一亦、其角の後を襲ふ。

六、江戸坐が藏前の通人と結ぶ時に四時觀あり。その反動として正風廓清の五色墨あり。

七、夏目成美は江戸俳人中の異彩、然も彼亦都會趣味の人たる事、なほ蕪村に似たり。

八、一茶の生活は江戸に適應せずして、田舍に徹す。これ自正風の精神と合する所以。

九、江戸はもと他國移民蝟集の地なり。農村の疲弊は自人を駈りて江戸の都會生活をなさ

漸くバラックの燒野の原に點在するを覗くともなく覗けば、中なる人々は漸く迫り來る寒さをわびつゝも、苦しき生活をかこちつゝも、なほ板間もる月影を興じ、軒うつ時雨の音ををかしと聞き、時に一句あらまほしのけはひありげなり。或はわが僻目なるかは知らねど、われ、時に舊稿をおもひ浮べて、末章說いて未精しからぬを悔ゆる事なきにあらず。

四、九月一日の火は年頃ものしたる稿本一切を燒き盡しぬ。たゞこの篇と外二三の小篇、一時のさかしらもて雜誌などに載せたるが灰とならずして殘れり。さらば、これなほ焦尾琴の類か。われ其角の揶揄を怖る。

しむ。

一〇、江戸の發達は、一切の移民を江戸化して、特殊の生活樣式を成立せり。その最高綱目を通となす。

一一、洒落本は通生活の敍述なり。流行順應について語る事多し。すべて都會生活の反映なり。

一二、通の生活漸く窮らんとして田舍をおもふ。洒落本も亦趣向一轉じて田舍趣味をとり入れぬ。

一三、都會生活の缺陷を忘れしむるものに俳諧思想あり。このものありて江戸の都市計劃成立せず。

一四、江戸の都會生活の禍難たる大火は、江戸人をして、正風の精神を理解せしむ。

一五、火除地と歡樂境、これ都會生活の明暗の二面。その對照はまた歡樂中に悲哀を寄す。そのわびしさまた俳諧精神と合す。

江戸文學と都會生活

江戸時代の文學をとり來りて、田園生活との交渉を論ずるは易し、都會生活との交渉を議するは難し。何を以てこれをいふ。江戸時代の文學はみながら都會に發生し、發達した る文學なるが故に、これを對象として都會生活を論議するは、つひに江戸時代文學を概說するの煩を負ふに至るべければなり。難しといふは、その內包の問題ならずして、外延についていふのみ。

もし、江戸時代に於いて、都會としいへば、江戸、京都、大阪の三ケ津以外三百諸侯城下町のあるを忘る可らす。これ等各自の氣風あり、文化あり、生活樣式なきにあらねど、未特殊の文學を發生するまでに至らず。大方、その文化は、三ケ津を模倣し、文學またその流派を傳承するのみ。深くあなぐらずして可なり。まして、城下町を外にしての山間海邊に何の文化あり、文學あるべき。平秩東作が莘野茗談の一節は、よく當時の都鄙の生活

の隔絕する狀態を盡せり。

東都などの如き繁榮の地に生れたるは、まづその人の幸といふべし。王城に生れしを三樂の一に數へけん、げにことわりぞかし。

住太夫ある時淨瑠璃の會を兩國橋河內半次郎かたにてせしに一日金五百兩集りたり。予も知る人なれは、招かれしに張札二枚つぎにて、なけし通りにあまりたり。江戸なればこそあれ。かく金銀を瓦礫の如くす。實に遊民時を得たり。これを思ふに遠國などの農民又は樵漁の屬、同じく蒼天を戴、租稅を收め御役をつとむ。衣肌を覆ひかね、豐年といへども糠にひとしきものをくひ、足手はひゞありて、いつが春やら櫻も紅葉も目にて見るばかり、地獄の中に劫數を經る罪人の如し。粒々皆辛苦といふこと古文にあり。昨日到城郭の詩など讀む度に涙のながるゝなり。

江戸時代の都會文學は、すべて、この都會生活の幸福を讃美するのみ。その比較として田舍の生活を蔑視し、その人々を嘲弄するのみ。田舍の人々、またこれを甘受して、一に

都會人のなす所にならはんとす。偶文字あるものゝその間にありとも、またひたすら都會文壇の趨勢に隨從せんとす。一世を擧げて都會文學といふはこれなり。

かゝる折に、俳諧なる一文學樣式あり。このものつひに、純都會の産にあらず。されば、李由は、俳諧を以て、全く山居の道具にあらずといひながら、また、解して、俳は市中にありて山林のさびしさを美むものなりといへり。更に芭蕉の俳諧あり、これ俳諧の醇乎として醇なるもの、その精粹をさびといひ、しをりといふ。幽玄を以て生命とす。山林田園の氣に活く。彼、時に市居すといへども、山林田園に神往す。當代文學と全く異る實質を有す。

然るに何事ぞ、芭蕉の性質を具せざる者の、市居して之を學ぶ。自さびを失ひ、しをりを逸す。都會の氣、山林の氣と相鬪うて之を逐へるなり。さらば、芭蕉の正風がいかに變質したるかを說く事によりて、都會生活の何たるを示さんとするは非か。また更に、變質せしめながら、その精神に背きながら、なほ、正風の形骸を棄てかねたる事より推して、

當代文學に於ける都會情調の飽和を說かんとするは非か。火を以て水を說くは俳諧の手段なり。都會生活と文學の關係を說くに、田舍生活にもとも緣深き俳諧を以てするは、蓋その手段にならはんとするもの。もしそれ三ケ津の都會生活を、江戸にのみ卽していふは、一時の便宜に從ふのみ。

二

元祿五年、芭蕉が橋町より再興の深川草庵にうつり住みし年の八月九日、許六は桃隣を介して、はじめてその柴門を叩いて馨咳に接するを得、また同時に師弟の契約を結ぶ事を得たり。この年ごろを、とく師の君にまみえんと願ひながらいつも行き違ひとなりて、かうまで緣薄きものかとかこち居たる許六なり。また遠く彦根にありて、蕉門撰集の書を枕とし、晝となく夜となく、その風體の實を探り當てんと努め居たる許六なり。許六がその日のよろこび推して知るべし。さるにても、をかしきは、その日の邂逅なり。弟子すでに

このよろこびあるを、師のうへにもこよなき喜びを齎したり。

許六は桃隣のいふがまゝに、此度の旅中得る所の數句を師に見せまゐらせつ。師見終つて、これらとりどりによし、中にもうつの山の句大きに出來たりといふ褒美の辭あり。そのうつの山の句にいはく、

十團子も小粒になりぬあきの風

蓋、許六の心私に得意とするものなり。彼、かねて蕉門の撰集に眼をさらして模索し得たるすぢを、いひ寄せんとて、二十句はど仕直し、二日案じ煩うて後に、小粒になりぬと治定したる推敲琢磨の作なり。師、この由を聞きて歎じていふ、愚老が魂を撰集にて索め當てたるは門弟子に許子一人のみ。晝夜、この魂を弟子に說くと雖、迪じ難し、愚老が本望今日にして達し得たりと。なほも、撰を見る事、許子に及ぶ人あるまじとかへすがへす稱してやまず。弟子、これを聞いて、一むらの疑雲の胸に徂來するあり。即ち師にたゞしていはく、われ高翁に對面せざる前に、晋其角に點を乞ひつ。わがよしと思ふ句には、點

稀にしていひ棄ての句に褒美の點あり。今日師の感じ給ふ句は、大方一點の句なり。然るに師の君殊の外に感じ給ふ。わが不審こゝにあり。師の高弟は晋子なり。師弟の胸旨、かほどにかはりてもよきものにや。わが俳諧と晋子の俳諧と符號せざるは何故ぞ、また師の風雅とわが風雅と符合するは何故ぞ、ねがはくば不審を明し給へと。師のいはく、許子俳諧をすき出る時、閑寂にして山林にこもる心地するを悅ばずや、元來俳諧數奇ならずや。弟子答ふ、然り。師いはく、わが好く所かくの如し、晋子がすく所は嘗てこの趣にあらず。その俳諧は伊達風流にして、作意の働おもしろきを主とす。故に晋子と許子と符合せずと。弟子また問ふ。わがさぐりあてし所、まことの俳諧の血脈に侍るやと。師いはく、この所毛頭疑あるべからず、心を正して俗をはなるゝ外はなしと。この事、許六の再三筆錄して自讃する所なり。

許六、氏は森川、名は百仲、井伊直孝に仕へて三百石を食める大身なり。されど彼は徒に仕官榮達を以て驕る者にあらず。乘かけの後に鑓を持たせ、步行若黨の黑羽織のすそひ

を風に翻さする仰々しき旅も官命による家の格式のやむを得ざるに出づとなす。即ち心は師の教をかしこみ申して、椎の花の心にも似んとする者なり。うきびとの旅にならふ木曾の蠅たらんとする者なり。心ひそかに風雅の先達のまことの意を體して破笠霜露の風にしみなんとする者なりけり。この弟子にして、はじめて師芭翁の俳諧の血脈をまさしくも承くるを得ん。自承け得たりといふ彼の誇りは當時人も亦許す所ありき。されば論の結着は人そのものゝ上に歸す。

其角の人となりに至りては、いかなれば、斯く師の君と裏うへぞと時の人も驚けり。一は曉の時鳥かけて斗酒をも辭せざるに、一は朝顏の花めでつゝ飯食はんとす。こはもとより些細の末事のみ。されどまた、時の人の驚けるは、師がよく其角を知り、其角がよく師の意のある所を知り、師の俳諧の實體を解し居る事これなり。

彼、師の七回忌追善の集を編み題して三上吟といふ。師の馬上吟、枕上吟、厠上吟を追懐しての命名なり。厠上吟とは蓋芭蕉が世に聞えたる長雪厂なるが故なり。芭蕉ある時い

ふやう、人間五十年といへり、我二十五年をば後架にながらへたるなりと。其角この事をその序に錄し、なほ追記していふ。元より心事の安樂止靜の觀念にいたりて風骨の吟聲を脫肉せられけん。この詞厠上の活法ならずやと。芭蕉の長雪隱を以て、その持病ゆゑとのみ見るべくは即ちやむ。其角のこの言葉、よく師の心境にわけ入り、その玄旨に適へるものといはん。

梁田蛻巖は當時に於ける漢詩界の雄なり。この書に跋して、其角のために辯ずる所多し。その一節を摘む。いはく。

東都の晋子は其門に出でゝ藍より靑き者なり。翁沒して玆に七年。庚辰冬十月十二日、其の忌辰に値ふ。乃ち同社六人を集めて懷舊七吟を作る。因て先師厠上の功夫を論じて以て其の首に冕す。晋子妻兒を帶び鹽米を莞し、酒を使ひ肉を啖ひ、每に軟紅街の中に往來し、其の作新奇壯麗、先師の枯澹を以て範とせず。蓋能く翁の心を得て翁の跡を踐まざる者。是又世俗境中の人に非ず。否んずば則ち豈によく其の玄を窺う

て以て厠上の妙を論ぜんや。

芭蕉の長雪隱は丈草にもなつかしき思ひ出の一つなれば、その三上辨に於て、言及せざるを得ざりき。しかもその辨の落想は、厠をかりて、佛經の思惟をもて源氏の觀相に合せたる俳諧にあり、支考が所謂虛中に實を行ひて、こゝに辨者の優遊を示すにあり。こは流石にうれし。許六がこれにも芭蕉直傳とやうに、行ふは、わづらはし。彼が說いて、詩歌連俳の名句も、此所より產み出し、大悟十八度も此室に入て工夫を極めりといふはよし。つくづくと、一とせのあはれを盡して、鳴くや霜夜の蟲、蘆の編目をもる月夜まで、人に心はつくめりといふはなほよし。世務所用のいとまなき身も、しばらく閉關する時は、印纓を解きて公役を許すとは、げにいひ得て妙とこそ案を拍ため。いそぎ閑居に入りて、跡を遠ざけ、半日の寂寞を樂まんと尻をかゝげて走るといふに至りては、誰か啞然たらざらん。知らず、其角にかやうのふる舞ありけんか。

すでに翁の心を得て、翁の跡を踐まず、これ其角その人の性格の然らしむるものか。さ

れど、また芭蕉の俳諧と其角の俳諧と必ずしも一致せざる理由を、地氣のけぢめより見もてゆかんは如何。其角は江戸堀江町の產にして、江戸の住なり。その生涯の大方を繁榮の巷なる日本橋に近く住ひせり。彼が池魚の災に罹りて、四谷に移りたるほどは、いかばかり佗しき月日なりけん。やがてもとの茅場町にうつりゆきたるも理なり。芭蕉は江戸の車馬の喧しきにえたへず。いはく、長安は古來名利の地、空手にして金無きものは行路かたしといひけん人の賢く覺え侍ると。この地を去つて、江東淸適の地に移り住めり。なほも彼は、無用の辯をなす人の訪ひ來るをいとひつ。故にいはく、

朝がほや晝は鎖おろす門の垣

その閑を樂しみ、佗をよろこぶ性情は、鎖おろしたる門の內にも安住せず、つひに斗藪行脚の人となりおほせたり。これもとより芭蕉の性格より出づ。されど今その芭蕉をして强ひて江戸に安住する事十年ならしめば如何、その都會の風にそましめば如何。或は其角の吟と似かよふふしもなきにしもあらじ。其角がその心を得ながら、直にその跡を踐まざ

るもの、また以て江戸の地氣の然らしむるものと解すべきか。芭蕉すでにこの理を解し、許六この理を辨へざりき。

芭蕉は、閑寂を好んで細きおのが句の姿と、伊達を好んで太き其角の句の姿と共に並みある事をいとはず。何となれば千歳不易の相と、一時流行の相と兩端をなすものゝ、その本たるや一なる事を知ればなり。風雅の誠より見る時、二にして一なるを知ればなり。都會生活者たる其角に都會の色調あるも亦風雅の誠より出づるを知ればなり。故に、其角が同門諸子と行歩を一にせざるを咎めず。去來未この理を知らず。

去來嘗て芭蕉に申す。正風數次轉ず。次韻に改りて以來「瓢」、「猿蓑」と變じ、「炭俵」に移る。さるを其角は不易の句には奇妙なれど、流行の句に趣を失ひ、吟跡師とひとしからず、咎むべしと。師其角のためにとりなしていふ。天下に師たる者は、まづおのが形くらるを定めざれば人おもむく所なし、これ角が舊姿をあらためざる故にして、予が流行にすゝまざる所也と。またいはく、角や今わが今日の流行におくるゝとも、行末又そこばくの

風流をばなし出し來らんも知るべからずと。とりなしたる人歿してすでに四年、其角に未流行の句なし。去來義憤にたへず、書を裁して詰る。其角答へず、その辭を少しく潤色して、おのが著末若葉の後序とす。末若葉は句の風姿、漸く正風を離れたるもの。其角のなす所なんぞ皮肉なる。許六角が所爲を解していはく、これはぢかしめを知らぬ故なりと。この解果して當れりや否や。

正風の移りゆくや轉ずる毎に枯淡の趣を加へたり。芭蕉その人のあらはれか。山林田園の心か。とにかくに清閑幽邃の氣の溢るゝを見る。

桐の木高く月さゆるなり　野坡

門しめてだまつてねたる面白さ　芭蕉

芭蕉いはく、炭俵は門しめての一句に腹をするゑたり。試に方々門人に問へば、みな泣事の、ひそかに出來し淺茅生といふ句によれり。わがおもふ處にあらずと。其角も亦その一人か。然り、其角は門しめてだまつて寢る男にはあらず。郭公のなく音と隣の部屋の反吐

のけうとき音とを同時に聞くをのこなり。されど、また彼は、よく默止の面白さを解し得るばかりに芭蕉の胸旨をわけ入りつ。たゞ身みづから行はざるのみ。彼は江戸に生れ、また江戸に住む事を樂しみ、また誇れり。されど、なほ、足一歩も江戸を離れざるが如きものに非ず、彼は生涯のうち四度京に上れり。かの芭蕉が、およそ風雅をいふほどのものは、一度は東海道を上下すべしといひけん好みにはすでに合せり。彼も亦行脚の何たるを解する者なり。

三

こゝに言をなす者あり。芭蕉の行脚を非難する事頻なり。いはく、

寔や、かの翁といふ者、湖上の茅檐、深川の蕉窓、所定めず住みなして西行宗祇の昔を唱へ、檜木笠、竹の杖に世をうかれありきし人なりとや。いとも心得ね。彼の古の人々は保元壽永の亂うち續きて寶祚も今やいづ方に奪ひもて行くらんと思へば、そ

こと定めて住みつかぬも理感ぜらるゝ也。今ひとりも嘉吉應仁の世に生れあひて、月日も地に落ち山川も劫灰とや盡きんずなんど思ひ惑はんにも、いづこの宿なるべき、更に時雨のと觀念すべき時世なりけり。八州の外ゆく浪も風吹き立たず。四の民草おのれおのれが業を治めていづこか定めて住みつくべきを、僧俗いづれともなき人の、かくこと觸れて狂ひありくなん、誠に堯舜皷腹の餘りといへども、ゆめゆめ學ぶまじき人の有樣なりとぞ思ふ。

これ、大阪に生れ、娼家に人となりたる上田秋成なり。彼は大阪といふ都會にはぐゝまれたり。故にその都會をよそに見て、旅すとせば、そこに新なる享樂、色道修行なんどのためにのみすべく、一に世之介の先蹤を逐ふべきのみ。彼は諸藝聞耳世間猿と、當世妾形氣とを著はして、八文字屋本に新趣向を寄せ、更に溯つて西鶴の壘を摩せんとす。彼も俳士なり。夙に几圭の門に遊び、また蕪村とも交情篤かりき。

秋成はまたその著癇癖談に於て、俳諧師を罵り、その行脚をあざけりぬ。

むかし、俳諧のすきびとありけり。芭蕉翁の奥の細道のあとなつかしく、はるばるのみちのくに下りけり。ある國の守の御城下にて日吳れなんとす。一夜あかすべき家もとむれどあらず。思ひつかれたるに、そこに門だちしたる翁のあるに、立ちよりて、懇に宿をもとむれば、翁うち見て、法師は達磨宗なるかと問ふ。否、さる修行にあらず。ばせをの翁の流を學ぶものなるが、松がうら島、象潟のながめせむとて、はるばる來れるなりといふ。おきな聲あらゝかにて、何某殿の御城下には、俳諧と博奕うちの宿する者はなきぞと云ひけるとなり。いかなれば、おなじつらに疎まれけむ、いとあさましくなむ。

この俳諧師は、つひに宿かり得ねど、なほ命に別條なきが僥倖なり。浮世床の俳諧師に至りては、あはれにも、はかなき最期を遂げをはりぬ。

びん「おらが裏に俳諧師の坊さまが有たつけ、おめへ、知つてるだらう。錢「ム、高慢な和尚だッけ。びん「やたらにちんぷん漢ばかり云てこけを威して居たが、あいつが

大笑ひよ。錢「ハア、どうしたの、いけもしねへ俳諧で、芭蕉の眞似をして、行脚に出たつけが。びん「そいつがをかしいはな、芭蕉の氣どりでの、をつな頭巾をかぶつて占者のやうな形で、頭陀袋をグット首にかけて如意とかいふ物を手にもつて出た所がいゝが。錢「まづそこまでは御宗匠さまだ。びん「ナニが、越後の方から何處とやらへ抜る山道で野宿をしたさうさ。錢「フム　びん「その晩の内に狼に食はれ。錢「エ。長「狼にくはれた。びん「さうよ。錢「ヤ、とんだ事がある物だぜ。びん「そこだテ、むかしの芭蕉は名人上手で、後の世に名を殘すほどのお人だから野宿もせうし、山坂で難義もして行脚さしつたらうが、德が備つてるから、災をはらふ。今時、あの坊主などが、俳諧を仕候、行脚に出候と形は芭蕉でも、腹が芭蕉でねへから狼に食はれる。「ハ、、、、皆笑ふ。

斯く、並べ來れば、三馬と秋成とが、芭蕉に對する態度の上に、少なからぬ距離あるを見る。されど、今は二人が、俳諧の行脚に對して好意を寄せざる事と、また二人が江戸と

大阪との別あれど、都會生れの都會住みなる事とをいひそふれば足る。さるにてもに旅は風雅の花、風雅は過客の魂の言もはかなく笑ひ棄てられたるかな。

四

去來がいひけん樣に、蕉門の諸子の句ぶりが、數々推移する間に、何とて其角は不易の姿にてありけるか。漸く幽玄の趣を添へ來る正風の行く道を行かで、かの延寶の亂調といはるゝものに停滯したるか。そも〳〵延寶の調とは如何。

神代もきかず百文の戀　　春澄
靈寶の枕草子をふし拜み　　桃青

○

もしもみつちやに戀やさめなん　　杉風
岩橋の夜の小袖を引かぶり　　桃青

一汗ながす谷川の月　　桃青
誰かこれを見て、この桃青がかの芭蕉なる事に氣づくものぞ。

さま〳〵に品かはりたる戀をして　　凡兆
浮世のはては皆小町なり　　芭蕉

元祿の調と延寶の調とはかうも違ふものか。かゝる戀のわびしき姿を眺め入る芭蕉となりてこそ、やがて、奥の細道の旅にして、「末の松山は寺を造て末の松山といふ、あひあひ皆墓はらにて枝をつらぬる契の末も終はかくのみと悲しさも增りて、鹽釜の浦に入相の鐘をきく」といふ人たるなれ。當時の芭蕉にして、なほ都會の生活に親しみ、なほ、とつと山家のいよ古狸などと口すさびつゝ、衆道の浮氣沙汰に心をせめて續けたらんには、或は知らず、難波の西鶴に對して江戸の大矢數なども、興行したるを。また知らず、西鶴が上方の傾城を咏み込みて

門立のもろこし樣に續く者は

初瀬の寺のかね持てこい

といふ時、これは吉原の傾城の誰かれをよみなす芭蕉なるべきを。芭蕉のしかならざる者は、その人がらの然ると共に、都會を離れて田園に出で山林に入りたればなり。其角が、ともすれば、都會の享樂を心おきなく詠みなして、西鶴めかす所の多きは、都會にとゞまればなり。桃青の延寶の句ぶりは談林の都會情調を喜ぶものなり。其角がそれになほ繫がるは、その都會趣味とこの都會趣味と相通ずる所あればなり。宜なる哉、其角の晩年、吉原の色酒の腹の底にしみ込むまゝに、正風のさびを遠ざかりて、談林の轍をふむことの多きや。正風をさながらに守らんとする者が、或ひは湖南に、或ひは嵯峨に、また或者は伊勢風の名によび、美濃風の名をよび、その他加賀に、尾張に、三河などの遠國に散在する間に、彼は沾德と共に洒落風、浮世風を成せり。沾德とは談林派に屬する露沾の弟子なりき。

五

洒落風とは何ぞ、不角の花鳥風と共に尊ぶところは談林が生命とせる機智のみ、輕妙嶄新の滑稽のみ、謎のみ、俳句なる短詩形が都會生活の一面にのみ結ぶ時、しかなりゆくは當然の事なり。都會の耳目に觸るゝ事物はたゞ變化そのものなり。煩しさと、もの狂しさを皷膜と網膜とに殘すのみにて、事物相互の間また之を繞る外界の間に有機的關係を認む る間もあらせず、たえず變化し推移しゆく。もしこの間にありて自正しき則の存在を知らしむるためには二つの條件を具備するを要す。その變化に秩序ある事一なり。變化する事物の中に不變の素の存する事二なり。斯くのごときは田園の事物を見るが上にのみ期待すべし。稻は苗より育ちて苅りとらるゝほど、たえず正しき秩序もて變化す。されど稻は遂に稻なり。然るに行く人と車とは如何。さきの人と車と去りてまたの人と車と來る。人と車は同じけれど、前後者自ら異りて、人も車もたゞに變化す。都會の生活はかゝる無限の

變化に對し、偶然の變化に接す。この變化に應じて宛轉自在、敏捷事に當るが機智なり。そはやがて都會人の特性なり。難いかな不易と流行との論や。この二つのものの間漸く密ならざる時、もと滑稽より出でたる俳諧が、惡ふざけに落ち、洒落に墮するは當然のみ。其角の俳諧は都會の俳諧として行くべき所までを行き盡したり。其角が蕉門の諸子より矢の如き非難を浴びせかけられたるは、彼等が芭蕉に追隨して山林に入り、田園におりたつ時に、なほ、都會市井の混亂を喜び居ればなり。あらず、俳諧すでに市居を避けず、また俗中に在るを忌まず。たゞ、其角が磊落の資質を以て縱横に都會生活の餘弊を俳諧の上に齎し來ればなり。彼等いはく、其角風雅の誡を逸すと。風雅の領域は廣し、其角をして思ふまゝの振舞させても、なほ餘地あり。たゞ風雅を以て、さび、しをりを主體とする正風の見地より解せんか、其角は、つひに風雅の賊なり。更にまた其角をして然あらしめたる都會も亦風雅の賊なり。

すでに標榜して洒落風といひ、浮世風といふ。かのさびとやら、しをりとやらは、何と

なう有り難きもの〻樣に承れど、あまりに緣なき遠きかなたのものさうなと思ひ居たる江戸の衆は、この俳風を喜ぶ事大方ならず。彼等は風雅とすぐそこに近所附合する心地したり。點取俳諧はかくて盛になりぬ。其角は點式にも新趣向を凝しぬ、且その理由を末若葉の序にも事々しく誌したり。この事必ずしも咎むべきにあらず、されど次のをかしきものを見ば、其角亦苦笑を禁じ得ざらん。俳諧師鬼角と商人點兵衞とは「浮世風呂」中の人物なり。いはく、

點「イヤホンニ、能い所でお目にかゝりました。一寸サ、伺ひたい事が御座ります。此間私が京橋を通りかゝりますと十二三の調市がちよろちよろと走つて參りましたが、やがて嶌に油揚をさらはれました。」

鬼「ハテネ」

點「私は品川邊まで用談あつて參じましたが、」

鬼「フウ」

點「彼只今の儀を見受けましてなんぞ一句ありさうな物と存じましたから、種々勘辯いたして、到頭高繩まで〻、やつと出來ました。」

鬼「ハテそれは御風流な事でごつす、ヘヱ何とナ。」

點「ハイ、マア、斯申しましたが、是でもよい事で御座りませうか、エ、ト」ト目を眠り仰向いて暫く考へ、「京ばしの」

鬼「フム京橋の」

點「ヱ、嵩さらひけり揚豆腐」

鬼「ハ、、、、」

大のまじめにて

鬼「ハイ、ハイ、隨分よう御座へせう」

この間鬼角の批判あり、これ俳句にあらず、地口にあらざる事の説明あり、省略す。

點「ヘヱ、成程、さやうなら私の申しましたのは俳諧にあらず、地口にならず、左

様なら狂歌で御座りませうか。」

鬼「イエイエ、狂歌では無い。ヱ、、まづそれは」ト大きに困りて、「マア、マア何さ只の十七字さ」

點「ヘ、ヱ。只の十七字、ハテ」ト、小首をかたむけて居る。

鬼「一體まづ主意とする所は晋子の句だネ」

點「ヘヱ、絹張と一緒につかひます。彼の何かナ」

鬼「イヱサ、寶晋齋」

點「ヱ、、成程、しうしうさいの坊さまの地口」

鬼「是はどうしたもの、寶井其角の句に」

點「ヘ、ヱ」

鬼「京町の猫通ひげり揚屋町といふがごつす」

點「南無三寶、夫をあなた能う御存じで御座ります。イヤモウそれをお存じでは、

臺坐後光しまひつけました。ハ、、、、さやうならば近日」トあがる。

鬼「屏風の張交畫などに書いてある句さ」

點「イヤ、見通し、トント御推量の通」

鬼「ハ、、、、」

三馬や諷刺し得て妙。この種の滑稽、風呂とのみいはず、凉臺に、髪結床にいくくりかへされけん。都會俳諧の嘲笑ふべし。

この點兵衛の如きは、しばらく措く。點取者流の大方は所謂通人なり、粋客なり。その一例を安永八年版洒落本「美地の蠣殼」の世界より拉し來らん。

相語る者四人。宗匠天馬は、丹後縞の羽織に、縞紬の小袖、上田八丈の黄色がちな下着に七ツ半頃の風通の帶といふ拵なり。新傘は鷹の羽八丈の羽織に青茶返しの小紋の上着廣東縞の下着、紫反古染の半袖の襦袢に緋博多の帶なり。祝鶴は黒羽二重の袷羽織に微塵縞の斜々子の上着に葱摺の下着、襦袢は淺黄に入子菱の鹿の子、絖緋の帶に三つながら黒襦

子の半襟、紋は雁の三羽飛ぶ所。琴孝は空色かへしの小紋の羽織に黒羽二重の上着、黒手八丈の下着、襦袢は鳴渡絞の縮緬、藤色博多の帶、半襟前に同じく紋は銀杏といふいでたちなりき。その語る所は皆點取りの事のみ。いはく、

新傘「昨日も月並の御會にめへりやせうとおもひやしたが、内がちと悪しくてめへられやしなんだ。在天冥々のひらきは、誰が勝ちやしたネ。しつかりといふ所をして置きやしたが、」

天馬「昨日は不運で結びもしやせん。在天は露孝さんがお勝さ。御句はひくい所でござりやした。」

新傘「何といふ句が參りやした」

天馬「懐紙をお目にかけやせう、書拔は何だらうと思ひなさりやす」

新傘「成程、アノ鯉江さんもよくいふねエ」

琴孝「定會にも出やうと思つたが、おつけへされねへ用は出來るし、勝てはせず、

畫巴分から夢を見たのさ。在天は外でもあるめへ、むすこだらうの」

新傘「何さ、鯉江さんの入句で「江の島の跡を出す氣の汐干潟」といふ句があるさ。へえけへもモウよくどうして案じねェければいけなへのさと、悪くはいふものゝ、汐干と三月の二のかはりをよく引ずり込んで案じたねェ、」

祝鶴「わつちの句はどうだのう」

新傘「おまへの句は御成めへの見せものを見るやうにはかれやした」

これ等の手合が俳諧に遊ぶは賭將棋うつとかはる事はなかりき。飽きが來れば、手の中の桂馬も飛車もさらりと投げ出しざまに、いづれは色里へくりこむ約束通り、四人も深川へと連れ立ち行く。

兎に角に、俳諧も遊女買の一資格となりはてたる今、「辰巳の園」の如雷が、新五左衛門を天晴通人に仕立てあげうの傳授事にも、「そんなら、宗匠へ弟子入をしねェ、存義でも金羅でも、祇徳、左傳なりと湖十などもよし、菊堂なりと氣の有にしねェ」と説ききかす今の

宗匠輩こそうたてけれ。恰かも西鶴前後の談林の俳士が遊所の悪洒落を見るが如し。故に「賣花新驛」に、その穴を穿ちてをかしきがあり。いはく、

江戸の未申、四こくの邊にさる獨立の宗匠あり。醉中庵嵐雜といふ。執筆二人あり一人は嵐非といひ、一人は嵐外といふ。きゝは買色をもて專とす。しかはあれど、ひたすら、よし原ばかり月夜としも思ひたらず。所かはれば品川も高點にのほせ、淺草川のあさくはあらぬ流にしたがひて、深川のふかく思ひいれてより、土橋、中町、矢倉下を最上の道具とし、されば根津、赤城、氷川、御旅も、神祇打越しをきらはず、裾つぎ洗濯は衣類にきらはず、こんにやく島は食類にかまはず、回向院前は釋教にさし合なし、千住板橋は三度笠かぶつても、旅體にならず。女と云とも地女は戀にあらずとのみ思ひおきてなれば、花の中の町、月は品川廿六夜、盛場同樣に人々これをあらそふ。さいつ頃より、峽驛日々に繁榮をなす、醉中庵のふるき組合嵐酒といふ人、定會のくづれより、近頃組合となりし嵐興といふ息子をそゝのかして、かの驛へいざ

なふ。

醉中庵は、もとより雪中庵をきかせたるもの、江戸の俳諧なる點に於ては、其角の末も嵐雪の末と異る所はなかりき。

宗匠嵐雜はいふ、やつがれも年二十だにわかくんば、ともにゆかまほしきを、今や耳馴になんなんとする身のうへ、杖をひくにものうし。明朝かへるさに、樓上のおもむき、くはしく語りたまへ。日記にしるすべしと。行きたい一杯の嵐酒は「宗匠はとても氣がねへさうだ」と、嵐與を誘ひ、嵐外をひきつれて出で立つ。無紋の黑袖に羊羹色の十徳姿の外は黑縮緬の小袖、古手直しの小紋縮緬の一重羽織の酒とつれ立ちて歩きゆく。外いふ、嵐酒さまのお膝のあたり、何でよごれました。酒いふ、二三日着ると皆酒でかうなる。外「かうなるかうなる、かうなる名遂げて身しりぞく、酒「こうなる、こういさんしよくりよ。何等の痴態ぞ。二三日着ると酒でかうなると得意然たる嵐酒いかで芭蕉がいふ俳諧の味を解すべき。彼如き者に芭蕉をひきごとせんは嗚呼がましけれど、芭蕉が箸とる物なき會席

に茶漬一二椀さらさら打したゝめて何とかいひし。風雅は斯くこそあらまほしけれ、すべて酒食の奢に際を費して俳諧の味を忘るゝは、遊里戯場の物ずきにして風雅の席には無下なりと。

誰か天馬嵐酒の口から、さびとやら、しをりとやらを期待すべき。彼等の行脚は岡場所行脚なり。その會得する所のさびとは、畢竟驛路の鈴のふられた腹いせ、海宗寺の鐘ぐわんぐわんと鳴になりぬいて階子をとゞろかして歸るあしたの事のみ。しをりとは、かの「美地の蠣殼」の深川通ひのかへるさにいひかはす言葉にとゞまる。

祝鶴「今夜のやうないまいましい晩はねへ」琴孝「さうさのふ、この腹いせは裏やぐらか、すそつぎで、」

彼等がつねに詠む所は、市中見聞の事物なり、たゞそれを風雅めかしていふがために、あらぬものを、たとへば木に竹をつぐ樣にして、いひ出るなり。彼等は、眞晝時に池の端の煙草店の前に立つ。されど店にさけならべたる煙管をそのまゝによみ出づる事なし。ま

づ闇に飛ぶ螢を聯想す。

不忍にひるのほたるや煙管鄽

兩替町を過ぎては、金銀の音をきく。されど、正面より金銀の音をさながら詠みなす事なし。彼等はまづ一夜さを待ちあかすといふ風雅の景物にきゝなほして、はじめて句の形をとる。

針口の音か雲井のほとゝぎす

斯くせねば、俳句といふものにならぬものと心得たるにや。似而非俳人跳梁して、似而非風雅跋扈す。「武藏六玉川」なんどの撰集簇出して、この陋弊愈々甚しきを見る。

流石は其角なり。彼は百間長屋にして、さる事ありと題して一句をものす。

時鳥人のつら見よ下水打

所は江戸川端の水戸侯表長屋なり。下水打つ者は仲間なるべきか。お長屋前を行く其角の裾には、しぶきのさとかゝる。彼は憤然聲をなしていふ、人のつら見よと。江戸ッ子の

きほひぶり鮮ならずや。しかも、彼のさるうつけさは、その心が空に時鳥の聲を逐へばなり。足は塵深き道を踏んで、心になほ自然に對する憧憬を失はざる事を強くいひ放てり。また市中白雨と題していはく、

嵩の香も夕たつかたに腥し

市中の景象を直寫して餘すところなし。北齋なんどが江戸の風景繪を披き見る心持す。腥しの一語下し得て妙。なほ北齋道勁の筆致と奇拔の構圖と相伴ふ所あるが如し。天馬、嵐酒の徒輩いかでか、この俳境に達するを得ん。

流石は抱一なり。彼は靑樓と題していはく、

此年も狐舞せて越えにけり。

この狐とは太神樂の手合が、扇と幣とを手にとりもち、狐の面かぶりて店頭に舞うて物乞ひありく歲暮景物の一に屬す。かの北齋が描きたる隅田川兩岸一覽下卷の最終の一圖、はや松飾整へて靜に春待つ吉原の籬の前に、笛太鼓の音に合はせて舞ふ異形のものこそ卽

ちこれ。抱一はかゝる境に年を送りつ迎へつする人なり。流連耽溺の人なり。されば彼は詠じていふ。

はつ秋や嗽茶碗にかねの音

この句、その集「屠龍の技」に於ては、たゞ鏘々錚々金鐵皆鳴と題するのみ。青樓に於て詠む所と斷るところなし。さるをなほ妓を擁して眠れるつとめての句と解せんとするわが眼はすでにひがめるか。嗽茶碗とは、うち翻すなどいふ不間をなさぬは勿論の事、巧みなる手際して、わづかばかりの水して口も嗽けば、顏洗ふといふ廓の作法に供する器と解するは非か。しかもその器にも秋聲を聽くと解して、翠帳紅閨の間にも秋のあはれを味ふ句となさんは如何。わがゆくりなくも、「北里十二時」の中なる辰の時の條の挿繪、北溪のものしたる青樓の圖中に禿が重げに捧げ來る、あの茶碗樣のものを聯想するは、餘りにかけ離れたる事にや。そはともあれ、抱一の俳趣は、其角を學びてたゞこの輕妙を得たり、その豪放を得ずといふものの、なほいひ知れぬ清閑を具す。

文化九年巢鴨の植木屋の菊人形に人々集うて罵りかはすを見て詠める。

見劣りし人の心や造り菊

この一句これを證す。彼は意氣と風雅をこきまぜし隱居にあらず茶人でなく、俳人らしく醫者でなく、何だかしれ者表德を過行というて浮世を酒と傾城に逃るゝ樣な俗宗匠にあらざりき。故に享和元年の春興に、

今や俳諧蜂の如くに起り麻の如くに亂れ其糸口を知らず。とはし書していふ。

貞德も出よ長閑き酉のとし。

かの洒落本中の俳諧者輩のいかで與り知るべき義憤ならんや。たゞ抱一と彼等とは品のけぢめこそあれ、都會の俳人たるに於ては一なり。通と半可との別こそあれ、江戸享樂の兒たる點に於ては一なり。

抱一は玉屋の抱誰袖を身請し來りて、宿の妻とせり。姫路の殿樣の御次男として、わざと好める佗び住ひの中に、なほ妻をして、そのまゝの廓言葉を用ゐさせたるその人と、墨

木賣を見て、身の賤しきを思へば、官女もかたらひ難し、心の鈍きを思へば傾城も猶まじはり難し、もし妹背をなさんに、このおなごをなんといへる芭蕉とは、餘りなる違ひ樣ならずや。

六

江戸の通は藏前の札差業者に極まる。彼等は武士階級の經濟の窮乏に乘じて鉅多の利を儲けなす町人輩なり。彼等は其金を誰憚らず遊里に播き散せり。よしや往年の紀文奈良茂には及ばずとも、江戸が有するあらゆる享樂の機關を利用し、都會生活が特權とする洒落三昧に耽りぬ。洒落本はその徒の遊興ぶりの報告の書なり、黃表紙はその繪解なり、舞臺の役者はこれ等の服裝を扮し得てはじめて喝采を博し得たり。彼等は當時の紳士の嗜として、風流の道に遊ばんために、まづ俳諧の道に入れり。その屬する所は勿論其角の流派なり。宗匠としてその間に立てるは其角の弟子祇空なり。この人もと紀國屋文左衛門の手代

なりしが、主家の沒落後、藝が身をたすけて、宗匠として重ぜられ、また幇間として輕くあしらはれぬ。紀文の富は豪放磊落たる其角をも、色里に隨從して、幇間あつかひしたる事もあり。今祇空その位置にあり。元祿と享和との遊蕩の推移をこゝに見るべく、また江戸坐の因緣をも覗ひ知るべし。

祇空を繞りて札差連の俳人に祇德、祇明、心祇等あり、自ら一派をなす。祇空また一號を敬雨といふ。大口屋治兵衛もその一字をとりて曉雨と號せり、井筒屋八郎右衛門も一雨と號せりこれ等相よりてなす一派を四時觀と稱す。蓋五色墨に對峙するがためなり。

五色墨とは素堂が葛飾風の餘流をうけたる二世馬光が當時の江戸坐の跋扈を憤りて、風葉、長水、蓮之、咫尺等と誓盟して起せる廓淸運動なり。正風體芭蕉翁、素隱士の餘派を揚げんといふが主眼なりき。おもふに素堂は正風の恩人なりとはいへ、彼は芭蕉の歿後に變風を唱へんとして、まづ去來に、芭蕉の遺風天下に滿て、漸く又變すべきに至れり、吾子志あらば我と共に吟會して、一の新風を興行せんといひおくりて謝絕せられたる人なり

き。今その人の流派によりて正風保存の聲をきかんとす。しかもそれに對して藏前に四時觀は起れり。藏前と葛飾とはたゞ隅田の川一つを隔つるのみにて、俳風自ら異るものあり正風の正體は畢竟江戸といふ都會の地には適はざる事、なほ上方の地に蕎麥が適さぬと同じ譯合なるべきか。江戸にもし正風榮えなば、そは江戸の正風といふべきものにして、芭蕉の正風にはあらず。許六、去來等の傳承する正風にはあらず。諸國邊陬の地に、つゆたがふまじと清規をまもる正風にはあらず。馬光等の功績は、或は三世素凡が馬光發句集に序して、爰に於て洒落風、比喩體一時に衰へ、江陽の俳人夢さめたりやといひし程の事はありけんも、夫等がよく芭蕉の堂に入りたるものとは斷じ難し。蓼太の技倆を以てして、さびにも細みにも徹し得たりと自負する程にして、なほ俗俳の名を免れず。四時觀の人々は、種々の理によりて、その蓼太を近けざりき。さればとて彼等は、俳諧の誠に心骨を削るものにはあらず。たゞ五色墨に對するは、その武家出なる故に相邀ひたるか。四時觀を樹てたるは彼等が富を以て衿持する如く。俳眼また世の點取輩より高しと嘯く如きものか。

藏前の通人の通俳なるもの知るべきのみ。

七

心にくきは成美の葛飾の地の閑居の樣なりけり。之を記す者はいふ。さゝやかなる柴の戸より小庭を隔てゝ藁もて結び伏せたる家の三尺ばかりの庇のもとに、何やらん机に書物ども廣げながら、やがて眠れりと見えて鼾ことごとしく外にまで聞ゆる折もありきと。これは隱者の常のみ、別にいふが程なし。されど彼は前にもいへる初號一雨後に宗成と號する者の子、代々の家名を井筒屋八郎右衛門とよふ札差なる事をおもへ。彼は川を隔てゝ葛飾に庵せり。四時觀派を脱して五色墨の地に身をおく、異とするに足る。彼が藏前の洒落三昧、遊樂三昧から逃れて清閑を樂むを得たるは、その多病の幸福なり、若くして痛風に罹りて足の不自由を來したる僥倖なり。さらずば三十四にて弟に家督を讓るべくもあらず仲間の附合酒拒む術もなかりけん。兎もあれ、彼は藏前を去りてより、正風なるものゝ玄

旨に觸れ得たる事やありけん。所謂末師をすて直に蕉翁の心を削り形を披て求める所を求むる事を成し得たる心地やしけん。その俳句に幽邃の趣の掬せらるゝがその證左。

されど彼は所詮都會俳人なり。寛政二年、彼藏前の家の屋上、露臺を架して、名づけて湧出臺といふ。蓋岑參の登慈恩寺浮圖の語を用ゐけん。則ち芭蕉が幻住庵の後の山に松の棚つくり藥の圓座を敷て猿掛と名づけたると、自ら異る所あるを見ずや。彼は葛飾の地にあれど、直に田園の興趣を穿ちて深きには至らざりき。彼かつて王維山水譜と題していはく、

若葉して遠き人には目鼻なし

自らは時に葛飾樵夫なんどいふものゝ、樵夫をも農夫をも、さながら、畫譜などを繙く樣の思ひして眺むるのみ。以て自然の懷抱に入るなどはまだ餘りに緣遠き沙汰なり。その見る所ばどこまでも市人の目、聽く所は市人の耳のみ。されば彼は藏前にある時も、葛飾にある時も、都會の人たるに於てはさまでの差はなかりけん。彼かつていふ、

塵境に身をしたがへて靜なる暇なし、唯日暮れば俗事自ら退きて少時寸心を養ふ。人に遠し宵より籠る蚊帳の山

これ期せずして、彼が眞實を語るものか。

人、もしこの蚊帳の句を誦せんか、必ずや蕉村の吟咏を想ひ浮べん。

諸子比叡の僧房に會す。余はいたつきのために此行にもれぬ。

蚊帳つりて翠微つくらむ家の內

これ一つりの蚊帳なり。三百里を隔てゝ、京の蕉村と江戸の成美と見る所、かくも一致す。暗合とやいはん、妙なる哉。この句蕉村にありては、いたつきの折によむといふ。されど、彼の句の全體に亘りて見もてゆけば、その病めると健なるとを問はず、かゝる態度のゆきわたれるを知る。何を以ていふ。彼はもと放浪羈旅の人なりき。廣く天下の名山に遊べり、されど眉をあげてその名山を仰ぐ時も、古人の詩歌を通じて、その翠影を見る。さなくば、畫譜を繙く心地して明光に接す。この點甚成美に似たり。彼も亦市中に在りて

山林を望むの人か。

蕪村はいふまでもなく、沾山に學び、巴人に就いて、其角嵐雪の兩系を辿りて、江戸風の俳諧を傳へたり。されど彼は必ずしも巴人の風調を模倣してやむものにあらず。かつていはく、我が門に示すところ、「師巴人の落磊なる語勢にならはず、もはら蕉翁のさびしをりをしたひ、古にかへさん事をおもふ。是外盧に背きて、內實に應ずるなり。」これを俳諧禪といひ、傳心の法といふ。わきまへざる人は師の道にそむける罪おそろしなど沙汰し聞ゆと。外盧に背き、內實に應ずとは、かの蛻巖が、其角を評して、能く翁の心を得て、翁の跡を踐まずといふと同じきか。

彼はかく、蕉翁のさび、しをりを慕ふといひながら、彼がよみなす句の上には、必ずしもその實績を示さず。彼は自然の襟懷を詠じてをかしけれど、人事世態に於ては、更に一段の巧みを加へぬ。よし自然をよみ出でゝも、多くは人間の背景をなすにとゞまる。この理如何。彼はいふ、我は晋子にくみして晋子にならずと。しかも、その句風を仔細に檢す

れば、自ら晋子の好尙の多きを見る。この理如何。これを彼が市居に卽して解せんとするは非か。成美と蕪村と、その天稟に於ては、もとより同日の論を以て云々すべきに非ず。しかも、何處やらに、細き絲の相牽く所あるを、その都會住みに卽して解せんとするは非か。

蕪村またいふ。夫俳諧の活達なるや、實に流行有て、實に流行なし。たとへば、一圓郭に添うて人を追うて走るが如し。先んずる者は却て後れたる者を追ふに似たり。流行の先後、何を以てわかつべけんや。たゞ日々に、おのれが胸懷をうつし出て、今日は今日の俳諧にして、翌日は又あすの俳諧なりと。このあすといひ今日といふものを、移して、この地、かの地といひ、この居、かの居といはゞ如何。蕪村はいはん、我は蕉翁のさびしをりを慕ふもの、されど、そのさびしをりは、行旅山林の間に於ては、まさに發して、翁が俳諧の如くなるべし。今市井塵巷の間に於ては、まさに、我が俳諧の如かるべし。これ俳諧禪なり。傳心の法なり。外盧に背きて、內實に應ずる所以なりと。

八

この事たる、一茶の句を觀察してやゝ信なるをおほゆ。

一茶の江戸に來りたるは都會の賑しさを慕ひ、その歡樂を逐ふためにあらず。その原のそのはゝならぬはゝき木に住なれし伏屋を掃出されしといふべき程の譯あつて出で來りし江戸奉公なり。方圖がない涼み舟も彼はたゞ兩國橋上に立ちてながめ見るのみ。裏長屋のつき當りに住居しては、まがりくねつて來る涼風を待つのみ。これが彼の江戸の生活なり。雪五尺積らうと、蠅さへ人をさゝうと柏原はつひに彼が安堵の栖所なり、故郷なり。もし江戸にありて葛飾風の宗匠とても世を輕う見て暮さんには、はじめより餘りに鄕土の氣に泌みはてぬ。

信濃では月と佛とおらが蕎麥。

月と佛と蕎麥とのみが信濃の手形にはあらざりき。しなのというて、さて、ではと續けたる聲調は、やがて信濃の手形なり。あらず、ではと重く低く强う下し來る所、宛然として登り詰めたる高原の中なる盆地を現し出さずや。どう霞んでもいびつなりといふわが里なるものゝ髣髴として見ゆるにあらずや。この里の農夫の間に交る彼には、成美のなす所はおもひもよらぬ贅澤の沙汰なり。されば揶揄一番、

俳諧の殿樣これへ御出でかな

ともよみ出でぬ。もし一茶が句、

妹が子は餅買ふほどになりにけり

をとりて、

妹子は蕎うつほどになりにけり

妹が子は鰒くふほどになりけり

と比較せんか、三人三樣の句境を知り生活を知る事を得ん。二者共に一茶を離る事遠し。何となれば二人とも蚊帳つりて山として樂むほどなればなり。一茶より見れば、二人のな

す所は畢竟兒戯に類せんのみ。たゞ芭蕉に

たが聟ぞ齒朶に餅おふ丑のとし

の句のあり、やゝ心の相適ふを見る。芭蕉の現實を離れて風雅に遊ぶと、一茶が風雅を現實のうちに索むると相反する事の甚しきは、なほ芭蕉の自足の生活と一茶の不滿の生活との差の甚しきに似たる一事は、今更いはじ。それにも拘はらず意外の共通點を見出す事の多きは何ぞ。都會生活に毒せられざる事相同じければなり。さればこそ、一茶はその俳諧の道をわけ入るほど念々芭蕉その人をおもひつ。

芭蕉様の脛をかぢつて夕涼

脛をかぢつての語、江戸坐者のいふを憚るところにして、しかも彼等の芭蕉に對する冒瀆の罪愈大なるものあり。一茶の眞率の詞に至りては芭蕉また莞爾として享けん。彼は到底に江戸坐の俳客が用ゐる粹語、通言を舌さきなだらかにいひなすべくもあらず、寧ろ信濃と越後との國界猿橋にして、

此處あちやとそんまの國界

とよむのけやすきに如かざりき。

一茶斯くの如くして、世の俳人の心にもなき風雅よばはりの面皮を剝ぎて、芭蕉の襟にまでとりつきぬ。否、芭蕉もまだ囚はれより脱し難かりし傳統的花鳥風月の趣味をも破棄したり。芭蕉が旅して求め得ざりしものを、彼は一所にありて求め得つ。芭蕉が風雅の誠を得ると得ざるとは旅するとせざるとにかゝはらず。最多く土に親しむ者がよくするに似たり。都會の地江戸に於ては、かゝる意味の俳諧はつひに變質しはてぬ。江戸坐なるものはつひに、正風に背きはてぬ。而も信濃の片隅に風雅の眞生命は復活せり。

一茶に勸農詞あり。いはく、

風流を樂む花圃ならで、後の畑、前の田の作物に志し、自鍬を把て耕し、先祖のたましものと命の親に思を盡し、吉野の櫻、更科の月より己が業こそ樂しけれ

この樂を知る人にして眞の風雅を共に語るべし。芭蕉が幻住庵にして、宮守の翁、里の男

の子も入來て猪の稻くひあらし、兎の豆畑にかよふなど、我聞しらぬ農談日既に山にかゝると書けるも畢竟これ等の心と下通する所あるがためか。一茶更にいはく、

松島鹽竈の美景より飯釜の下肝要なり

これをとり來りて西鶴が一代男にいふ所と比較せんか。

この朝眺の面白さ、西行は何知つて松島の曙、象潟の夕を譽めつるぞ。昨日は新町の暮を見捨て、其目も直に今日島原の朝明、これが唐にもあるべきや。

都會享樂のうはうはしさと、田舍のたつきのまめまめしさと、その違ふ所、今更に人を驚かす。さびの眞味自らこのまめやかさより湧き來る。

正風のさびは市人の間には、その眞意を掬すべくもあらじ。たゞ市人市居を避けて勦鍬をとるか、とらうとおもひ立つ時にこそその意義を見出さるべけれ。これ、正風が江戸の地に底深く根をおろし得ざりし理にして、その種が、遠き諸國の田舍にこぼれ落ちて、蓬がくれ、荆がくれに、小さき花をつくる理なり。さらばまた何故に田舍の地に、咲く花の

いやはえにはえぬぞ。質に於ては當然榮ゆべき俳諧が、何故に、田舍の悠々たる自然の間にさまで振ふ事なくて終りしぞ。要するに、江戸時代に於ける、社會組織經濟組織より來る缺陷たる農村の疲弊にあり、農村文化の微弱にあり。かの微弱なる文化の前には十七字詩の文學を發生し、享樂したるをせめてもの幸といふべきのみ。さるにても一世の文化を壟斷し、文學を獨占し得たる當代の都會は餘りに多幸なりき。當代の都會がその天寵に心驕りて、あまりに我威をふるまふ時、その文學はやがて、自然に歸らんとし、田舍に思ひを寄せんとす。この折にこそ、質に於て本來山林田園のものたる正風の俳諧が、都會の人々の間に、心からなつかしう偲ばるゝなれ。

九

抑江戸といふ都市はいかにして成立したりしか。これが建設に與れる者は參州に於ける德川氏相傳の臣なる旗本の士なり。勿論甲州武田氏の遺臣、また相州北條氏の遺臣にして

徳川氏に歸服したる旗本の士もその數に加へざる可らず。武州の地侍は、あらためて徳川氏の帷幕の下に今まゐりとして、馳せ參じぬ。斯くして成れる城下町には、勢州、江州、美州及び尾州の商賈ども、いち早くうち集ひぬ。しかも、江戸の庄以來の住民は、たゞそれ等上方の手合の商賣上手を羨望と驚異の眼もてうち仰ぐに過ぎず。

伊勢屋の暖簾掲けたる家が勢州出の商賈たる事は問はでもしるし。彼等は商機を捉ふるに敏にして、黄金を散ずるにものうし。これ伊勢屋の名が川柳に於て、つねに守錢奴または吝嗇漢の異名としてよばれ、嘲弄せらるゝ所以なり。されど江戸のたゞ中も、そのはじめはこの他國者によりて占められたり。町方普請の義は、日本橋筋より道三河岸通の竪堀を堀られたるが始りなりと誌せる「落穂集」は、更に記ず。いはく、始の程は町屋願の者も無之所に伊勢國の者數多來り屋敷望仕之由、其ごとく町屋出來候後、表にかゝり候暖簾一町の内に半は伊勢屋と申す書付見え候也と。

京の呉服商家城太郎次が、江戸に移住のはじめには、常盤橋の橋詰に立て辻賣りすとて、

腕に呉服物を一二端宛かけて商へり。それを買ふ者多きほどに、腕もたゆければ、やがて竹馬床の工風をなせり。木馬の樣に、竹もて兩足をしつらひ、上の方に長き竹を横へそれに呉服物をかけて、擔ぎ歩くなり。これ「事蹟合考」の記載にして、事は寛永六七年の程なり。然るを同書によれば、彼者本町に賣店を出してより、追々日月を重て、京大阪より呉服物商人、本町につどひ集りて今世の如き數百家とはなれりといふ。

斯の如き事例は一々之を列擧するの煩に堪へず。よし、煩を厭ふ事なく列擧したればとて、皆が皆、江戸草創の際に於ける上方人士活躍の實證を示すに過ぎず。彼等はかくも江戸に集ひ來れども、決して江戸に永住せんとするにあらず。彼等は黄金の影を逐うて來るのみ。故にその黄金の正體をだに捉へ得んか、遽に去つて上方に歸り、もの靜なる京の町に隱居して餘生を樂しまんとす。西鶴の町人物は巧みに此の間の消息を傳へり。されど、また西鶴は、その當時の上方の者に告ぐるに江戸の地に荒儲しに行く事の遲きを以てす。「日本永代藏」にいふ。利德に生牛の目をくじり、虎の御門の夜をこめ、千里にゆく奉公、

朝に星をかつぎ、秤竿に心玉をなして、明暮御機嫌とれども、以前とちがひ、今繁昌の武藏野なれども、隅から隅まで手入して更に掴取もなかりきと。もしそれ「膽大小心錄」の秋成に至りては、例の冷罵骨に徹するものあり。

しん上ならずは江戸へことおしやる、江戸はしん上のさだめかやと昔はうたうた。今では江戸も京も田舍もおんなし事で流人のながさるゝ所でも、金持つて新町や島原の太夫を身うけしていんで樂む事じや。

さりながら、そは一面の見に過ぎず。事實は依然として江戸の地に蝟集する者の多きを如何せん。しかも上方よりするのみにあらず、あらゆる國々より雲集するなり。かの「膝栗毛」に、香の物桶、空俵、破れ傘の置所まで、地主たゞは通さぬ大江戸の繁昌、他國の目よりは、大道に金銀も蒔散しある樣に思はれ、何でも一稼と志して出かけ來る者幾千萬のかず限りもなき云々といふ所のもの、その數が誇張に失する故を以て、笑ひ棄つべきにあらず。

まこと、彼の一茶もさる椋鳥の一羽なりき。

椋鳥と人にいはるゝ寒さかな

彼江戸に來りては、手をすりて蚊帳の小隅を借りるといふ程の奉公の身なり。彼はまづ江戸屋敷の贅に驚けり。

馬までも萠黃の蚊屋にねたりけり

一茶が出鄕の事情は、もとより金を目當のそれにはあらざれど、他の椋鳥の大方は、とく金を儲けう、儲けて贅澤をなさう、都會の生活の歡樂に涵らうと、さし迫る現在の惱みに追ひたてられて、さながら夢行病者のやうに、憧憬の影を慕ひ行くなり。苛重なる收稅は代官手代の私曲によつて、いやが上に甚しく、小農民は相率ゐて田舍を遁竄せり。否、身を以て逃れずば、そこには恐るべき水牢の存するあり。いとし娘の身代金もつひに未進の年貢に事足らず。否耕して食はんとするに、その先祖代々の田畑はすでに人手に渡り了りぬ。江戸に出でなば、何かしら生活のたづきはあらうの一念に、やがて彷徨乎として

大都會の中にあこがれ出づるなり。農村疲弊の悲慘なる狀態は、さきに平秩東作の言を引いて說けり。また言をなすものあり。山方野方に生れては正月三ケ日といへど米を食はず、粟、稗、麥などを食に炊くとても、茱、蕪、千葉、芋の葉などを糧として、穀物の色は見えぬばかり、それも朝夕飽く程に食ふ事はなし。都會人に食はせなば、宛然鐵丸を食ふ心地して一口も咽喉には入るまじと。これ田中邱隅がしるす所。かゝる境遇の人々が一度江戸入して職にありつき、米の飯を口にしそめては、何條再地獄のはてに歸らうの心を起すべき。乞食しても江戸御府內のうちにさまよふ事をのみ期せん。即ち近代都市人口の膨脹の厄運は當時すでに現はれたり。これ爲政家の屢發令して歸農を命ずる所以にして、而も實績擧らざる所以なり。かの詩人にして志士なる梁川星巖の如きは稀なり。星巖幕末の黑船騷の折に江戸に寓せり。彼おもへらく、外寇迫つて江戸の籠城となる時、江戸の糧米はもと地方の輸入にしておのづから限あり。かゝる折に無用の一人あるは有爲の一人の食を減ずるもの、その罪や淺しとせずと。即ち飄然去つて江戸を去れりといふ。されど斯

くの如き人のうへ、芭蕉の如き行旅斗藪の人と共に、今しばらく考ふる所なし。たゞ江戸永住土着の人に關していはんとす。

一〇

軍事都市は政治都市となりぬ、今また經濟都市となれり。三河侍、甲州侍の指料も細身になりぬ。他國の者は儲けなしたる富を鄕里に齎らす事なく、江戸に家藏を購うてすでに代を經たり。御祖先のとりつき一件はたゞ惠比壽講の語らひ草となりて、今の若旦那は生粹の江戸ッ子なり。

金の魚虎をにらんで、水道の水を產湯に浴て、お膝元に生れ出ては拜搗の米を喰て、日傘にひとゝなり、金銀の細螺はじき、陸奥山に卑とし、吉原本田の刷毛の間に、安房上總を近しとす。隅水の白魚も中落を喰ず、本町の角屋敷をなげて大門を打は、人の心の花にぞありける江戸ッ子の根生骨（通言總籬）

然り、この根生骨は、つい江戸の文化の極致なる所謂通なるものを完備せり。江戸の都會生活の髓腦たゞこの通なる一語に盡く。通の記錄の集、讃美祝福の書は實に洒落本なり。通言總籬は其の一なり。同じ洒落本なる「淨瑠璃稽古風流」にいはく、

師匠「ム、おまへは上方生れか、未だおまへの若イとして下りなんしても間も有るまい、きつい江戸詞になりようの」高慢「サア、そこがあだ名に高慢じやアないが、きついもの、去々年下つて十日程立つと直に江戸詞に直しやした。コリヤ、又師匠様でもあるまいし、上方者か江戸者かは、地合やなりでも知れさうなもんだす」

これは上方詞を尙ぶ義太夫節の師匠の家に於ける會話なり。知るべし、上方者がその言葉までいかに江戸化すべく努力したるかを。彼等嘗ては江戸に來りて文化の先進を以て擬する所ありき。今や斯くの如し。その他の國々の徒輩に至りては、何の厚顏を以て江戸の人士に對等なるを得ん。

われら他國よ、貴所さまも又他國よ、たへかいちかひに、のうさてお目をくださあ

りよ、おじやれは誠にのうさてお目をくださりよ。

これ江戸のはじめ吉原にうたはれしほそり盡しなり。ほそり盡しの他の一にいふ。

ほそりのやれ出所は大和の壺坂、その節なほすな美濃の谷汲おじやれは誠にのうさて美濃の谷汲

かゝる田舍唄の流行せる頃、誰か後の浮世風呂の中にかゝる話をきかうとおもひがけし。月八「江戸は半太夫、河東、この二に止るよ。流行唄も諸國のいりごみだから、下卑た田舍節の流行るはうらみだぞ」やみ吉「瞽女の唄などが流行つては怖れるス。」月「長唄、めりやすなどは、音聲が淸んで其淸音だからいゝ。瞽女節を始として、すべての田舍唄は濁音で、音聲が濁つてゐやす。それを嬉がつて唄ふはチト心得違だらう。」やみ「ソシテ文句なども、下卑きつて、つまらねへ事だらけ。」

江戸にも時に田舍唄の流行する事あり。潮來節の一時を風靡して、吉原の靑樓にも耳かしがましさに堪へざる事あり。しかも江戸の通がる手合は必ずしも心から傾倒したるにあ

らず。

月八「イヱ又、さうかと思へば、潮來曲などといふものが、さのみヤンヤとも思ひやせんが、廢らずに流行る。是も一拔通り過ぎた人には面白くねへが、若い人の目先の見えねへ內はまづうれしがる奴さ」

何事にもあれ、江戸が田舍にひけを取つてたまるものかとは江戸ッ子の腹なり。彼等はすでに江戸に生れたる幸福を他に誇示せずばやまず。彼等口を開けば卽ちいふ。

面白と目出度といふ事、扶桑廣しといへども東都に止る。名にしおふ日本橋の側、魚店軒を並べ、四時にかはらず。日々千金を商ひ、ぶりかれん、百かれんの唐音は輕子呼ぶ卷舌と爭ひ、初松魚價百貫にして遠近に飛。鮟鱇は珠玉に換て東西に走る。鯛は諸侯に奉じ、まぐろは下賤の食物買上る河豚飯食屋の廳。棒手振は生鰯鮭の魚を售て妻子を養ふ。人物活々として勢昇天の龍の如し。二合五夕の酒に醉ては、源八と鬪諍に及び、親分柔訣と制すれば、雙方口を閉て止む。和睦の河漏ふるまひ、異客前帶

と殷勤なり。さんげざんげの提灯は兩國橋より長く、納た刀は梁より大なり。

なんまいだん佛の大音には、佛も耳を塞き、六根淸淨の騷劇には不動も逆上すべく梵天萬度の振やう、張込太平は親分の流義に隨ふ。遠慮延引の間違、先刻先日の誤、片言互によく通ず。仙の字手拭半顏をつゝみ、紅の褌寒風に飜る。般若の面、女の首の入瘧、亂鬢長髮は仲間の禮なり。相伴ふ、顏見世の積物虎屋が蒸籠けんびしの空樽大路に山をなし、若者中の張札帳屋が筆跡と見事なり。紋々の手拭は木戸錢をかざり屯しとうつ手拍子近隣に響て鳴雷とあやまたる。（狂訓彙軌本紀）

遊廓と劇場とはもとより都會生活が自具備すべき機關なり。殊に江戸の時代に於てその社會組織、經濟組織の變調より不正當とおほしきまで特殊の發達をなせり。洒落本の通はもとよりこの二者の情趣を基調とす。彼等はそれ等をとり繞り周圍のわやわやに押しつ押されつして有頂天となる。踏んだ踏れたの果のなぐり合ひも畢竟繁華の象徵として歡ぶ。花の山も雜踏の人の山なればうれしく、納凉舟も舟なればこそこの人數と驚くほど人を載

一

せたるがうれし。さては道端に、犬の糞の多きを以て江戸名物の一とす。彼等いふ江戸には人家多し、從つて犬を飼ふ事多し、これ一は江戸の繁華を示すと共に、江戸の人のもの惜しみせぬ事を明示する事なりと。さてまた何故に犬を飼ふ事多きかの反問にあはば、彼等は答へていはん。盗多ければなりと。貧富懸絶するは都會生活の常態なり。もの盗む者の多きは畢竟貧しき者の多きを意味す。彼等は江戸の都會生活の呪ふべき一面を忘れて、却てその富と奢とをこれ誇る。笑ふべきに似たり。

二

多田爺の「遊子方言」を以て江戸洒落本の祖に擬せんとするにはもと異論あり。たゞ洒落本一般様式が、この書によつて治定せられたりといふは別に異議のなき所ならん。「戯作評判記花折紙」に當世の小冊子も皆このしうちを見習ひましたと見えますと見ゆ。しうちとは何ぞ、趣向とは何ぞ。通人めかして、しかも通人ならぬ半可通と無垢の息子との對比より

をかしさを誘ひ來る趣向なり。半可通の獨りよがりの滑稽事の巧みは、同書に、黒仕立八たんみちじやう、第一番目、傾城買の通り者の役には船中からの様子、土手の悪洒落、大門までのうぬぼれ、中の町の茶屋にての大鹽屋、てれぼうのおもしろみ、平氣な顔のをかしみ大當り大當りと褒めそやしたる言葉を借るれば足る。即ち知る、黒仕立の通り者は當時の江戸時代の最高文化生活様式に熟した顔して、する事はたゞ聞きかじりの生半熟なるを。さる者は廓の女のいち早く見てとつて鼻あしらひしてのけつ。これに反して、素樸純眞なる少年は、さる作法になじまねど、却てもてもし、よい目にもあひもする事大通と同じ程合なり。いはゞこれ江戸に於ける俳壇の大宗匠を以て任ぜる手合に、正風の眞髄を逸したるが多く、却て遂陬僻地の無名の俳士に芭蕉の魂をさぐり當つる者の存すると同じ譯合なるか。

そはとまれ、通の通たる所以は、永く都會の生活に熟し、大方ならぬ訓練を經、教養を重ねたるものにして、はじめてその德を全うすべし。遊子方言が一度範を垂れて以來、作

者等は更に新なる趣向を索めて半可通に代ゆるに遠國侍を以てし田舎者を以てせり。淺黄裏といひ、新五左といふは皆その異名なり。彼等の着附、なり振をいへば、花色小袖に淺黄裏をつけ、洗ひはげたる黄無垢の下着、黒紗綾の帶に都内縞の袷羽織に、甲斐絹の裏をつけ、袖頭巾をひらひらと冠り、尻をしんじんばしよりにして黄木綿の足袋に藁草履をはき、大小を閂ざしにさして、萠黄羅紗の柄袋を掛けたり。その態度をいへば、楊枝屋の娘の美しきに氣をとられ、傘の澤山なるに興をさまし、ちよき舟の早きにおどろき、金魚の數にあきれ、植木の青々としたるに、目をさまし、楊弓のカツチリちりゝんに胸をびくつかせ、からくりの太鼓に氣をぬかれて、大きなる鼻紙袋の落ちさうなも知らぬげなり。これ「辰己之園」の新五左衞門なり。この樣な人必ず洒落本の境域を二分し三分してその一を保てり。彼等いかでか、猪牙舟の乘り樣を知らうぞ、船改め番所前で頭巾とる手順を知らうぞ、北廓にゆくとては、土手へかゝる前に鼻のさきに唾して死人焚く臭さをかゞぬ工風を知らうぞ、持物にも丸角の花かん袋、堀安の煙草袋住吉屋の煙草と極めをつけうぞ、酒さ

へ飲んでよし飲まぬがよし、すべて時の流行のまゝ。めいよう今の通は下戸さといふ總籬時代には、隨分と鳴る咽喉を叱りつけずはならず。彼いかでかさる用意のあり得べき。江戸の文化人都會人はこの通なる型を眞向にふりかざして、これに當てはまらぬ者をば、野暮の惡名のもとに排除し去る。野暮は遠國侍と田舎者とがその名を負ふといへど、江戸生の江戸育の者もその型にあてはまらぬ限りは、この醜名を甘受せざる可らず、彼等は質に於て遠國侍と異る所なければなり。遠國侍といへど、この型に通曉し、この型に隨從する以上、また通を以て遇す。各藩の御留守居の如きこれなり。江戸の演劇と戯作との大半はこの關係を闡明する事によりて、興味と趣向とを豐富にす。

都會生活の煩はしきは、流行を逐ふにあり。しかも都會生活に心醉する徒にとりては快き煩しさなり。彼等の生涯は流行順應に終始す。かくしてのみ生甲斐ありと信じつ。流行の轉變の甚だしき、時は迅速に物は微細に入る。例せば浮世風呂初篇に見える樣に、「褌のさがりを腮へ挾んで締めてゐる」と敍して、その上に「古風に」の語を加へざる可らざる

文化の頃となつては次の安永の笑話のおちは必ずしも人々の顎を弛させじ。

「春笑一刻」にいはく、

コ、かゝあ、鏑はないか、女房「又きたねへ處をぬかうと思つて、亭主「ばかをいへと、髭をながら、あごの下へあてろ　女房「それそれきたねへ處だもの「何こゝがきたねへもんだ

女房「夫でも不斷ふんどしをはさみながら。

よもや、さるものに流行はあるまじと思はるゝ筋も斯の如し、その他のもの推して知るべきのみ。

流行に後れず、しかも流行の正しきを捉ふ。これが當世男なり、當世女なり。當世の實を得るの道や難し。もし、試みに當世の意義を、その當世の通に問はんか。彼等はかうも答へん。

凡股くらを出るより、今日只今に至り、見る事、聞く事する事、爲す事、興世推移すゝはきとかけながす　是當世なり。

また、彼に、新なるものゝ意義を問はゞ、彼口とく答へん。彼がいひ續け、說き來る一つ一つのくしきものを一つ一つ合點する事を得て、はじめて、當世者たる資格を得ん。大正の當世にして、安永の當世を解せんとす。また難いかな。

桑田碧海は康醫の栄箱持も語ずる所、死んで生れて又死んで生る事のあればこそ、美人才人紛然として其間に雜出、移換は世の習ひ、鑼堀埋で曲馬を騎、三叉の築出は身振りで入りを取る。猛き豪猪も見せ物と成ては嚙勢なく、全盛の何某も請出されては盲にしたがふ。蘆簀の中に坐掛の長歌あれば、筵を張て八人藝の分奏あり。紅毛渡りの眼鏡は、通行を充にしてめづらしく、乞食の樣な氣違は、繁華を尋て狂ふ。別莊の譟を樓船へぶつさらつて行方知れず、陸の掛聲を橈に云せて飛が如し、根附の生寫は工輸子が工に勝り、米粒の似面は離婁が明を負す、三粒の名人下りて兩八に鼻をあかせ、玉簾はやつて鹿子の甘味を失ふ。親玉と稱ては光をまし、腐海老と名がついては隣の猫に喰る。圍八を唄る年季野郎あれば、十町が墨跡を守護にする子守あり。

紅擢化して懸流の夏相思草入となり、貧乏な酒屋にも極彩色の菰被を置く。街道湯漬の約を盡し、唐山卓子の奢を極む、風鈴の音は蕎麥と知れ、御手鳴ば銚子と氣取。神樂堂をそゝる色男あれば、講法の場を揚屋にする飾輿あり。舞妓は萬事三味線等に呑こませ、働者は闇雲に一枚紙を寶とす。念佛一篇の御亭さんも、送迎に口車をいひ、鬼かと疑ふ老婦さんも、大口說の濟人となる、已惚な客或は夜半に歸り、美しい女房は早く後家になる、說に來る談義なれば、座舗の內に芝居あり、糸に間拔の拍子あれば、歌にやをはの掛引あり、鼓吹はいそがしと高慢に、藝者は彼屋敷といやみなり。釋迦嶽涅槃の雲にかくれ、黑岩秀で富士を負す。仕出の燈籠は井戸の中で火がとぼり、新ン作の義太夫は伊勢物がたりに節をつけ、くゝり枕から煙草をつぎ、川の中で炬燵にあたる。舟子出情でも熟みを親方にしてやられ、鍵屋が骨を折つても玉屋と譽らる。月に村雲花に風、十呼盧には驄馬多く、納所はたま〳〵芳町へ行つて、眼玉の出るほど呵られ、和尙は大黑を孕ませても知者鮮し、盛なる時は制し、衰る時は制せらるゝ

とは忠度卿の一句なり。なんぼ足下がりきんでも、盛ンなるにはかなやしよまい、漢土の癡人は蔬と麥とを分たず、此方の愚鈍はあざとすべたを知らず、漢土に輦の嫌ひな貴人あり。此土に大八車を誇侍女あり、錦繪染の下着あれば、浪華染の襦袢あり、情奴僕も嬰武此藝とさへ、吉田町にも本莊露考より、新ン盡し美盡せり。近頃壯樓咏集を見るに詩あり、曰、柳風舟織二隅川水一、菖發糞爲二新宿塵一、足下よく是を以て悟れ。

斯ばかり、新しき事を知るといへど、なほ未し。舊を知らざる可らず、本づく所を知らざる可からず。「風俗問答」の著者劉道醉著先生は更に示していはく。

夫、知ること三つあり。一に時を知り、二に風を知り、三に穴を知る。而て知らん顏で居る。眞のきまりの氣取なり。是極上の考へ場、誰も斯こそ有べけれ。新を愛するにもあらず、古を守るにもあらず。空々弱々として樂亦其中に在り。新しく橋を懸ても、きついさえもなく、新流に節をつけても當坐ばかりではやらず。新古の理屈を

罷にして唯知るを知るとせよ。青樓の佳人も知つたかといひ、下界の少婦も知れし御事といふ。或時は愚となり、又或時は智となるは生ある習ぞや。陋巷に割鍋あれは、隣町に綴蓋あり。古語にいはずや、長いもあれは短いもと、千變萬化して學ぶべし。

もとこれ一篇の戯文に過ぎざれど、當時の人々が、流行迅速の間に身を處して苦める事の甚しきを語るものなり。新と舊との中に立ちて、眞によく三つを知るものにあらざる限りは、たゞ奔命に疲れはつるのみ。斯くて、半可通の異名を得るに過ぎすとすれば、寧野暮で暮らすの暢氣に如かず。しかも江戸の人士は好んで、この至難の行路をわけ行かんとす。都會生活もまた禍なる哉。

この流行の語は、必ずしも俳諧者がいふ所の流行と一致せず。されど新古の間をくゞりて眞の氣まりの氣取に達するは、千歳不易と一時流行との中ゆきて、眞の風雅の誠に到達する類か。一茶の信濃にあるや、江戸の成美に書を寄す。

邊地に引込候へば、彼流行とやらんにおくれはせぬかと、これのみ用心仕候。

一茶にして、すでに然り。他の業俳連中が血眼沙汰も理なり。彼等が洒落本の流行と俳諧の流行とを、一つに結びつけて得意なる時、風雅の誠は遠きかなたに逸し去れり。しかも彼等は悟らず、あらぬ方を見詰めてあり。

一茶は、ますます一茶なるものに精進せんとす。彼は外に索むる所なく、たゞ寂然として内に己をのみ觀ず。これ自を以て株を守るものといひなす所以なり。彼その著株番に序していふ。

われ等がたまたま練出せる發句といふものも、自、新しきと誇れば、人は古しとあざけり、再よくよく見れば人の沙汰する通り、いかにも古くほとほとおのが心にも倦んじ果て、三口許りも口を閉れば、是亦木偶人の如く、へんてつもなし、よしよし汝は汝とせよ、我はもとの株番。

彼は外に索むる所なく、たゞ寂然として内に己を觀る。彼が觀るところは兎以外に物なし。これ都市人馬雜踏の地に於てよくすべきに非ず。彼が江戸を去つて柏原に蟄する理ま

さに然り、彼自らの俳境を拓き得たるも理まさに然るべきものあらん。

元祿年中、三井八郎兵衞、駿河町に越後屋といふ店を開きて萬現銀掛直なしの名のもとに呉服の切れ賣をはじめたり。一日千兩の商ひに江戸を驚したり。西鶴は日本永代藏にその利發才覺を稱へ、其角はその繁昌のさまを見て、

越後屋にきぬさく音や衣更

と吟じたり。然るを許六は所謂正風のうへに照して大方ならず非難せり。彼はいふ、世上に新しきものと今めかしき物とをとり違ふは非なり。新しとは古來あり來りて人々の見殘しいひ殘したる物なり。蕉翁の句の「初雪やいつ大佛の柱たて」の初雪の配合、初の字のつかみ、名人の骨髓とはこの義なり。これにひきかへて、其角の越後屋の吟は今めかしきを取出して發句にするは以ての外なり。放興いひ棄の卷などはさもあるべし。われみつからも、ある時、

海手より夜はほんのりと明けかゝり

越後屋見せる松坂の馬士

の句ありき。江戸の越後屋京の越後屋、をかしからず、松板の越後屋にして、はじめて俳諧と斷ずべしと。この見解を以てする時、正風はつひに都會生活に適應すべくにあらず。されば許六に難ぜらるゝ其角が都會の人として都會を讃美して、同じ都會の人西鶴と一脈通ずる所あるも理なり。

一二

洒落本の趣向は、通と半可通と野暮との鼎立にあり。作意は、作者の好むがまゝに、滑稽と穿ちとのけぢめこそあれ、この鼎立より生ずる笑ひにあり。所詮は通の眼を以て不通を嗤笑し、嘲弄するにあり。故に千篇一律、皆同じ笑ひに歸着するのみ。もし、これを救ふものありとすれば、吉原より深川、品川、新宿、さては山下、大根畠などと所謂岡場所をめぐる舞臺の變化なり。抑岡場所の發達したるは、吉原の廓の作法があまりに煩瑣を加

へたればなり。深川の如き、事毎に反抗の氣勢を示せり。幾篇かの酒落本は、その論爭の經過を語るために著はされぬ。されど論の結着は、吉原と深川とを超越したる通の闡明なり。その他、舞臺こそかはれ、いふ所は同一樣のみ。もし人ありて、當時の頽城買指南所と看板かけたる庵を訪れんか。庵主はまづ吉原の遊びについて傳授せん。さて深川、つぎに品川について傳授せん。

深川などは、鹽梅が、よし原とは大に違ふ。これも中町、土橋を遊べば、つくだ、櫓はおのづとしれやす。

扨、品川じや。これは專ら、よし原をまねてみれども、物ごとちやちにて第一女郎の品がいやしい。中には高慢な奴もあれども、大概何のなにがしといはるゝ女郎も、牀の內でのはな歌などで、ぐつとあひそのつきる事だ。

かやうな事をときかせて、さて後、他の岡場所をば一言にして盡さん。

さりながら、まづよし原、品川、深川の三箇所を能く遊ぶ時は、餘の岡場所はおして知る。

所詮岡場所といひ、四驛といふも、皆江戸の酒落の境域なり。そこそこの通は、おしなべて、江戸の通なり。ことごとしく、音羽の通といひ、三田の通といふも、江戸の通の中に蠢動するに過ぎず。通の漸くに行詰りして、變通なるものを生ずるは當然なり。通の行き詰る所、酒落本また行き詰つて、何とかして目さきをかへざる可らず。今までワキにのみ控へさせたる田舍者、不通者、野暮客をして、そろそろとシテにまはす工夫をとり來りぬ。田舍言葉も、重要なる材料になり來りぬ。

天明元年板に「眞女意題」あり。芝神明の遊里の穴を穿てり。その中のワキ役陸野奥右衛門といふ國侍、仙臺紬の綿入羽織に、十六うちの長紐を、片膝に結び下げ、花色太織に淺黃裏、あき樣草履をひきかけて、大小を貫拔ざし、お高祖頭巾をのつけに冠るといふしろもの、斷りいふまでもなく、野暮の極上。その野暮と片言とが、なかなかに愛嬌づくりてをかしきが、その書の喝采を博したる譯合なり。彼は、汁のつみ入を知らざりき。

忠「おめへは御酒のうへだから、飯はあがられめへ。」
奥「ネエナ、酒へ呑んだればとて、兵糧しめづけるにやつけへねへ事いし。ムヽヽあらくい汁だ。コ、レ、ヤ、姫のりもし。」
忠「ナニ、肴のつみ入さ。平のはつ茸がつがもなく、ありがてへ。」
また彼は神明名物のちぎを知らざりき。
奥「イヤ、忠公。アノ鳥居のまへにならべて有る、ちつこひ箱は何ンでごいす。」
忠「アリアア、摶風といつて爰の名物さ。」
奥「おれや、ナニ、小人島のおかわだんべいとおもつた。」
この奥右、時に味な事いうて、人々をよろこばせぬ。彼は二階の藝者のうたふ唄「天が下戀と情はうらおもて、ほれて見さんせ、いとしけれども、かとござる」を熟々ときゝ入つていふ。
何のハアかたかんべいチヤ、惚れた中だら、じだらくだんべい。

なかなかに通者はだしの洒落をいふ。されど通じ難きは彼の國言葉なり。彼と一坐の客町人忠治こそ解せ、他のものには彼の通譯なくてはかなはず。
忠「ソリヤ、さうと、アノ濱松町の女郎の行燈は、ごふてきに奇麗でごさへすね。」
奥「イヤ、ソ、レ、ヤ、見ぬ事いし。只澤山に有ッたのは、わくに張つた火袋もし。」
女郎「ヲヤ、ひぶくろたア、何のこつたェ。」
奥「ハテ、おつぺし行燈の事もし。」
女郎「ソリヤア、マアどんな物だへ。」
忠「アリヤアてうちんのお國ことばさ。」
作者はまた奥右のお國言葉を紹介せんとす。
奥「コ、リ、ヤ、若いふと、寢間に有るてつぺん袋を、とつて來てくんさい。」
女郎「何をへ。」
奥「てつぺん袋もし、」

大「何ンだかむちやだす（といひながら、はしごを上り笑ひながらばたばた）何だと思つたら頭巾の事さ。」

かゝる場合はよし、忠治の通譯する場合はよし、さなき時は江戸の衆は、たゞ狐につままれた心地やせん。さきの兵糧しめづけるにやつけへねへ事いしといふも、女郎を褒めておかなくいつくしないじやなどいふも、大方の見當こそつけ、誰か明確にその概念を捕捉し得べき。お國言葉の紹介に忠實なる作者は、卷頭まづ、陸野奥右衛門國詞と題して、篇中に出づる所の國詞を、いろは分にして載せ、彼此對照して、そのをかしさを添へんとす。引用文中の國言葉の解釋を擧ぐれば左の如し。

（い）いつくしねへ（うつくしい事）　（お）おかなく、（とんだ、つがもない事）　（あ）あらく、（すさまじくといふ事）

（し）しめづける。（しめこむといふ事）　（ひ）兵糧をしめづける、（めし喰ふ事）

作者は、よの部に、よ、し、や、れをあけ、解していふ、よしやれと詰めていふを、切つていふ。「そ、り、や」「こ、り、や」「あ、り、や」など同じ。此國のならひなりと。また「きこきこ」はびくびくする事と註したるくだりにいふ。すべて、此國の人、物の音をいふ

事いたつて下手なり。末にくわしと。蓋、篇中に奥右が言葉の、「夜番に當つたばんげは、拍子木イぼんがり、ぼんがり鳴して」といふぼんがり、または、「鶏がきつかう、きつかうと鳴くは」というて、「昔は輪違輪違とないたさうな」と揶揄せられたるきつかうをさしていふか。作者の用意周到なり。

これを辰己之園の附錄の通言集、及びその解釋、または唐言と名づけたる挾み言葉の說明、さては、とんだ茶釜、藥罐とばけるの辯などと比較する時洒落本の進歩か、はた退歩かと疑はざるを得ず。都會情調に行き詰り、通に行き詰りたる洒落本は、その趣向に行き詰ると共に、今は不通の世界に轉じ、野暮の世界に轉じ、滑稽の世界に轉じて、滑稽本の時代にうつりゆかんとす。吉原深川の廓言葉を如實にうつし出したる努力が、田舍の方言を如實にしるさんとする努力に移れり。江戸と田舍との交渉漸く事繁からんとす。

眞女意題の作者萬象は當時有數の通客粹人なり。その眞女意題出板の後六年にして公にしたる「田舍芝居」に至りては、以上の傾向になほ一段の鄙ぶりを加へたり。世界は越後、

そこに出づる者、すべてそのまゝの越後詞なり、些の江戸詞をきくべくもなし。芝居見物の衆の片なまりは勿論、舞臺の上も亦然り。今豐年踊會我田植對面の場の幕切のせりふ少々を引いて片鱗を示さん。

朝比奈「時にはや、余義ない、無心でござるが、二人の者に肴をはさんではおくりやり申スまいか。」工藤「わしもはア、さう思ひますが、何も持合せ申さないとそこらを見てよくござると十郎がぬいた笠を取りあげ、片手には朱鞘の山刀を持、十郎には竹の子笠、五郎には此小刀。是が肴だ、つまみなさろ」と、二人つかつかと十郎五郎「アヽ、是が肴だアとか、」工藤「笠のうふせればふじの山、半夏過ての竹の子笠、五月の末は駿河の國、富士の裾野の陣屋の内へ」十郎「夜這は仕つけた、おいらが兄弟、簑笠かぶつて忍び込み、」五郎「親仁の敵と名乘かけ、すのこも通れと切れ付たら、」朝「血はまつかいなさが刀、」五郎「此赤鰯の山刀で、」十郎「本望をとげろといふ事か。」五郎「とてもの事だら、今爰で」朝「ヤレハア、せつ込事はない。此場は別れて歸りなさろ。」二人「別れづらい所だが、せう事が

ない、いぎますべい。」虎「咄が有て來申したが、取紛て云ましない。」少將「是から内へ歸り道、咄しながらいぎますへい。」朝「サア、いゝ道連が出來ました。行道筋は向ふの田の畔」

ト云ふせりふをきつかけに正面の簾が、ばつたり落ると、見わたし二三里の天地自然の大仕かけ、是は江戸では出來ぬ事なり。見物ぶちぬきぶちぬきと云てほめる。

どこぞ、いゝ麥畑があつたなら、ころけこんだが、よくござる。虎。少。「朝比奈さア」朝「二人のおしやらく。」五。十。「すけ經殿」工「二人の若しよ」皆々「さらばでムりヤス」と見えわろくならび

工「先、今日は是切でござりもふす」打出。

作者がかゝる滑稽を齎し來るは、はじめより思ふ所ありての業なり。行詰れる酒落本、都會情調本位の酒落本に對する反抗なり。彼は明に序及び跋に於て、態度を明にせり。序にいはく。

先に遊子方言、辰己の園の二書出でてより、年々歳々、其糟粕を啜つて、似たり寄

つたりの洒落本斗升を以て量るとも量り盡すべくもあらず。其洒落本を閲するに底の底を穿んと欲して、八萬奈落の汚泥を堀り出し、くまのくまを探さんと欲して、六萬坪の塵芥を堀出し、見ぬ事淸しの影穿鑿、くら闇の事をあかるみへ持出されて、娼、妓の身の上には迷惑に及ぶ事少なからず、是見るに興なく、見らるゝに害あり。實に笑を取に失して、苦笑を惹き出すに至らしむ。是をや過たるはなほ及ばざるが如し。

彼は、當時流行の洒落本を斯く見たり。さておもへらく、

洒落本の洒落を見て、洒落る洒落は、洒落た所が洒落にもならねば、只可咲を專とすべしと。

彼は、所謂洒落本にあらぬ野暮本を著はしたるなり。江戸本ならぬ田舍本を板にしたるなり。洒落本の傳統を命とするもの、江戸情調を念とするものにして、この書を見、この序を讀まば、いかなる言をかなす。果然、京傳は江戸ッ子として、洒落本作者として怒れり。おのれを諷するものとして憤りて、つひに絶交に及べり。

されど、そは京傳の短慮なり。萬象が此の書をなす、決して野暮本位に立てるものにあらず、田舍本位に於ていふにあらず。そこに一人の通客なく、一人の江戸の見物なけれど、作者ははじめより、讀者を江戸の通者として豫想せり。この野暮本といふは洒落本に對しての野暮本なり、通人の眼に映じたる野暮の書なり。どこまでも、江戸本位なり、通人本位なり。作者すでに序に於て洒落本の作法を說いていふ。正の物を正で御目にかけずしてしかも正の物の如く見するを上手の藝といふべし、戯作も亦然り。實を以て實を記すは實錄なり、虛を以て實の如く書きなすは戯作なりと。要はをかしさを傳へ、笑を催さしむるにあり。田舍の世界も、田舍の舞臺も、舞臺の田舍言葉も、たゞ滑稽のための手段に過ぎず。後序に於て錦女命の昔を思ひ、わさおぎならぬわざくれは、世間の洒落の裏を行くしりくめ繩の横なまれる夷振のをかしみといひ、又跋に於て、今世に行はるゝ洒落本の或は妓の耳の垢、又は娼の臍の脂の穿鑿仕たる樣な、片づんだる物とは異なり。通となく、野夫となく、一度よめば腮のかけがねをはづし、數腹筋のよれて、其をかしさやめどなしと

いふもの、愈々以て作意の底を割る。一九の「田舎草紙」は直に其趣向を襲ひぬ。京傳これを知らざるにあらず。餘りに、我身に思合せて事を失したるのみ。

田舎芝居の見物中に、明に江戸もの〻一人を拉し來りなば如何。彼をしてその見聞くものに一々江戸の定規をあてはめさせなば如何。作者萬象亭の作意なほ一層あらはならん。これ、眞女意題の趣向をうらうへにし、人物を置きかへ世界をぶんまはしたるものとなるべし。斯くの如きものを膝栗毛以前、すでに蜀山人の洒落本、「道中粹語錄」に於て見る。これ通を主題とする書の舞臺推移の變遷上、重要の位置を占むるもの、等閑に附する事能はず。

道中粹語錄一名を變通輕井茶話といふ。江戸の通人の眼に映じたる輕井澤の遊女のをかしさを寫し出すを主眼とす。輕井澤といへば、一代男の世之介が色の淺ぐろきを磨き、木賊刈る山家者の胼胝をなほさせ、裂織の肌馴れしを木曾の麻衣に着替へさせ女郎に仕立ぬるこそあれといひし追分の地に隣す。また辰巳の園の新五左衛門が一夜の遊びして峠まで

送られて、歸りには必ず寄らしやりませといはれたる所なり。蜀山人この地をかりて、いかなる言をかなす。

旅人は織色木綿に黒羅紗を裝束した半合羽を着、唐ざんとめの綿入、下着は袖のかはりの縞、襦袢の襟は黒紗綾といふ拵の江戸の人、相方は黒木綿紋付の布子、桃色の木綿、うらふき二寸ばかり出したるを着て、花色太織の幅の狹き帶をしめる。下着は三つ四つ着た樣に見ゆれど皆襟ばかりとぢ付た物にて胴より下は綿入一つ、これは所の風俗と斷らねばならぬ代もの、二人並べ立てただけにてもをかしきを、まして遊女が語り出す方言を聽きなば誰か笑を禁ぜん。

始めてといふ物ああじなもんで、これぞといつて語るべゑ事もおざんねへものさ。

それにハアお前方の樣な江戸衆にやア、何をいつても笑はれべえと思つて語るべえと思ふ事も語られねへちやあ。

更にまた酒席の滑稽に至りては一段を加ふ。主從二人が相顧みて一々珍なものと指示すれ

ば應酬するものまた奇言を以てす。

一、「コレ此箸を見や」

「なんでも今夜アへんちきさ。」

「ヲヤ寒竹の事をお江戸じやへんちくといふけだの、」

二、「此肴を見や」（干物のむしり肴也）

「とんだ事ぶゐんの干物だの、」

「いんね、ぶゐんじやアござりましねえ、あじの干物でござりまするよ。」

三、「大概いくつ程喰べなさる」（女郎が牡丹餅を食べて居る也）

「何さお江戸衆なんだア、信濃衆なんだア、信濃者とつて大喰のするやうにいはつしやりますけれども、私どもはそんだアじやござりましねへ、此位の牡丹餅だら十七八もくへば澤山だもし。」

四、「まだ食やすが、そんなに盛付ちやアくひにくいわいな。」

「どうでも、お江戸衆だあナ、わし共が方なんどじやア絶食だアといふ病人が此位にもつたのヲ三盃許アくひますよ。サアお汁のウ進ぜませう。」

擧げもて來れば、これ等皆江戸といふ尺度を當てゝ、見てはじめて、をかしさをおもふ。即ち知る、輕井澤の遊女は、このお江戸の衆の相方の遊女のひき立役なるを。甚しい哉、江戸の衆の色育や。彼等は江戸を離れてもつひに江戸以外の色合の何をも見るを得ざるなり。斯くして江戸以外のものを嘲笑する事によりて、彼等は熟々と江戸に生れ、江戸に育ちたる歡と誇とに狂ぜんとす。

この趣向はやがて「東海道膝栗毛」の中にうつされぬ。なほ田舍芝居と田舍草紙の關係の如し。その三島宿の章と粹語錄とを比較せよ。光景敍述さながら相似たり。然も同一の方言を以てするが便なりとてか、一九は二人の女郎を輕井澤近みの追分より拉し來れり。

女「この間、木曾街道の追分から來た女郎衆か二人ございます。おさみしかアお呼びなさいませ」

を、連鎖とし、

この二人、まことに此間追分から來たと見えて、是は皆あつちの言葉なり。皆々をかしさを隱しだんまりにて聞いてゐる

をいひ譯として、粹語錄のゆき方をたゞに倣へり。老猾といふべきか。ぶゐんの干物の事、絶食の三杯飯の事また膝栗毛中の一材料となるを見る。この種のもの、江戸を誇りかにいひ現すに都合よければなり。

更に都合よきは、田舍者を江戸に連れ來りて、事毎に物毎に驚歎の叫を放たしむる事なり。田舍者をしてシテ役を演ぜしむる趣向なり。この趣向はすでに江戸初期の各種の旅行記名所記に於て見る。たゞ、江戸の文化を誇るべく田舍者の無智を指笑し嘲弄せんとする罪深きものは、感知亭鬼武の「有喜世物眞似舊觀帖」にとゞめをさす。舊觀帖に於ける主人公は奥州羽黑村の老女とその甥と、越後蒲原の人と甲州韮崎の人との四人なり。彼等は江戸の榮華にあこがれて見物に來りぬ。しかも彼等は無智蒙昧粗野の言行世にかゝる人あ

るべしとも思はれぬ程なり。たとへば老女が宿の下女と共に錢湯に入るくだりの如き、僅の行數の中に彼女が江戸に對する譯しらぬ尊敬と江戸の風慣に憫はぬをかしさを示す。

女「モシモシ、おゆもじをといておいでなせへ」

婆「おらアお江戸の衆に不禮だんべいと思つて、わざとしめて、はいりもふサア。それにハア洗濯前だアから、ついでに風呂の中ですゝぎますべえもさ」

女「ヲヤヲヤ、それこそぶしつけでござへまさア」

かゝるものが、當時流行せる膝栗毛の江戸衆の田舍旅行の裏をかへして、田舍者のお江戸見物となしたる趣向の推移なる事は直に合點すべけれど、ともすれば洒落本の通の世界の敍述の直系に屬すといふ事を拒まんとす。しかも、これ等を通じて一貫せるものは、同じ江戸人の眼を以て見、耳を以て聽くにあり、田舍者の眼を以て見、耳を以て聽くに非る事を思ひよせなば、意自ら釋然たるものあらん。

禍なる哉、江戸人の江戸自慢や。彼等はたゞ江戸が世界中に於て最高の文化の地なる事

をのみ信ず。通の形式に隨從するが人生最高の生活なる事のみ信ず。この信念のもとに、彼等は他を顧る事なく、また己を省る事なし。故に眼界愈制限せられ經驗の範圍狹隘を加ふ。その習慣固定して徒に形式の末に趨る。さきの通なるものは、最明に之を語る。通を敍述したる洒落本亦顯著に之を證す。

變化なき一圈内に强ひて變化を索む。流行なるもの、愈出で纖細を增すのみ。變化なき生活に變化を望む。茶番狂言素人芝居は斯くて盛なり。俳諧また單なる消閑の遊びとしてのみ行はれぬ。江戸の戯作者はこれら江戸市民の代表として、江戸文化を謳歌し、通を讃美するのみ。何のさかしらを以てか、江戸の生活を分析し、批判し、都會生活を解剖し、論議すべき。嚴肅なる研究の態度を以てこれを問題とする一人の作家もなかりき。よし一九の如き、時に江戸人の生活の矛盾を指摘する事あれど、所詮は一時の喜笑に資するのみ。三馬の諷刺も都會生活の根本に觸るゝ事なく、たゞ市井陋巷の間のかひなで事に力を致すに過ぎず。舊觀帖また然り。田舍者の眼を以て、耳を以て、見もし聞もしたる都會生活の

批評をなすべく、都鄙の長短に就ていふべき好材料を具備しながら、つひに趣向の新奇を以て、江戸の好評を享け得るに過ぎず。江戸人は餘りに江戸の美酒に醉へり。その醒めたる時は既に遲し。江戸時代は去り東京時代は襲來したるなり。江戸の破壞者、東京の建設者は誰ぞ、江戸の衆によつて、江戸ぶりを知らず、江戸の生活樣式に通ぜずと笑はれたる野暮漢遠國侍の子孫なり、馬鹿者よばはりをされたる田舍者の後裔なり。色里に虐待せられたる國侍は憤然去つて國に歸りて書を讀み、劍を學べり。田舍者は笑はれながら、失策をくりかへしながら、江戸見物の往復に幾多の見聞を廣めて、智囊を大くせり。その堅實なる精神と直截なる態度とは、つひに通人の子孫を江戸より驅逐せり。思へば無反省の誇ほど意味なきものはなかりき。

一三

江戸市民は江戸を熱愛す。されど彼等はその愛する所以を知らず。その愛は計畫なく秩

序なき盲目者の愛のみ。江戸の成るや、爲政者家康の胸裏に軍事と經濟に關する遠大なる計畫はあり。されどその計畫に從ふには、外延は餘りに廣く、內包は却て熟する所なかりき。故に家康以後の爲政者はまづ內包に卽して、考慮を拂ふと雖、彼等はあらかじめ企圖する所なし。自然の發展を待ち、餘弊この極に達して、はじめて限度を規定す。蓋江戸の如く急激なる發達を遂げたる都市に對しては、科學を基礎の近代都市の組織的經營、秩序的計畫を以てしても、なかなかに將來を策する能はざるべし。當時の建設者がたゞ愛と混沌とを以て對策とするも蓋やむを得ざるに出づ。

江戸市民は江戸を熱愛す、されど彼等は江戸に對して、自主的に自治的にその共通の利害關係を最よく處理すべき行政上の理想と能力とを有せざりき。これもとより江戸時代の社會組織及び制度の然らしむる所、決して彼等の罪にはあらず。彼等は江戸の一細胞の町內の自治については參與する權利はあれども江戸の市政に於ては一片町奉行所の布告以外に知る所なし。市民權を求めて得ざる市民と、與へざる市統治者と、市に對する熱愛に於

ては差等を見ず。されどその期する所に、幾多の矛盾を齎せり。これ統治者と被治者の相違のみならず、統治者たる武士階級の理想と町人階級の理想との衝突より出づ。

單なる一例を拉し來る。江戸の遊廓は元和三年に公設せられたり。當時五ケ條の御條目をその設置請願者に下附せり。この第一條にいはく、

傾城町之外傾城商賣等不可致、並傾城町圍の外何方より罷來候共、先々へ傾城遣候事向後一切可爲停止候事。

この條の精神は、江戸の市をして、淸淨の地たらしむる事を期するにあり。直接の因は旗本の土の風紀に關すといへど、とにかくに市民をして剛健の元氣を失はざらしめんとす。故にまづ從來江戸の各所に存在したる私娼の群を駈りて劃されたる一廓內に隔離したり。また賤しき女子供の良民の間に出入するの自由を奪ひたり。遊廓の存在は都會生活に於ける種々の關係上必ずしも否定し難し、況やそれを江戸繁昌の一因ともおもひたる爲政家はすでに公設を許可すとはいへど、同時に江戸の墮落防止の實を擧げん事を計れり。されど

当時の町人の納税の義務を負担したこと。
負担の程度は市政に関係があり。

納税の義務以外國政に與らず殆江戸市政に與る事を得ざる町人が欲求する所は、剛健の氣象に非ずして、遊蕩の享樂にあり。江戸初期の武士はとまれ、時勢と共に町人化せる武士も亦町人と共に、遊廓許可の當事者の精神に戻れり。統治者と被治者とのこの闘は江戸時代に亘りて行はれ、被治者の性情は、遊戯性の文學となりて現れたり。樂翁公の將軍に奉れる意見書の一節を見もてゆけば、元和の御條目の復活を期し、岡場所の殲滅を期する事を知る。いはく、

賣女屋の儀運上の源ふさがり候て、直道の嚴刑御座候はゞ、自然と相止りて風俗正しく可罷成事、吉原品川等は不苦、芝居等も不苦、奉存候。又人情之活路は無之候と害又々夫により候て生じ申候事

樂翁のこの意に基く改革も狂歌師、戯作者にありては一嘘にも慎せざりき。

吉原品川も不苦、芝居等も不苦とは、樂翁公もいふ。まこと、遊廓と劇場とによつて象徴せられたる享樂ありて、はじめて社會の一切の不備は補修せられたり。こゝに遊ぶ限り

は酒に醉ふものが、すべてを忘るゝ様に、あらゆる不備を忘却せしめぬ。更にまた、おもひも寄らぬものゝ、補修と忘却との作用をなすがあり。俳諧これなり。俳諧の主體は夏爐冬扇にあり、俗中雅にあり、どこかに一犀火ほどの超越性なからざるべからず。これは正風と江戸坐とに拘はらず。江戸坐を以て正風に背くと非難すとも、論は畢竟、その超越の程度の如何に歸す。いかなる流派の俳諧といふとも、これなきものあらんや。赤裸々に實感を詠ずる一茶には、より鋭くより強く、このものゝ、中に發動するを知る。かの俗俳の憎むべきは、このものと絶縁したるためにあらずして、中にその實なく、外にその衒あるがためのみ。超越はやがて清閑、また洒脱、さては忍辱の悲しき諦め、はかなき悟り、さびといひ、しをりといふ意義は知らずとも、何とはなしのわびしさ。今しばらく、これ等を一括して俳諧といふべくば、俳諧の當代に於ける效用驚くべきものあり。何を以てこれをいふ。

近代都市の問題を論議する者のまづ數ふる所は都會生活の、要求する必需品また奢侈品

の製造場が、都市の地域を犯し、風致を害し、黒烟と雑音とによりて人の神經を麻痺せしむる病現象を如何にして防止すべきかに在り。江戸の時代と雖これ等の事實なきに非ず。

俳諧よくこの問題を解決す。

其角が茅場町の住居の北に隣りして蘆荻繁く笹阿める空地あり。水をためて池めかし蓼の花穂に立のびて景色よし。されば彼はそなた様に窓を開けて樂しみ居たるに、何事ぞ、遽に一資本家によりて、工場として蹂躙し盡されんとは。文七といふ者が元結こく所となれるなり。其角自記していふ、尾花鶏頭菊女郎花所せくまで掘捨たる、無下に風景を殺せりと。またいふ。やうかはりて虫のねもたえ、小菊の花ものこらねば、あらあらしき野分の行衛雨晴れて、邵生が瓜、諸葛が茱萸を空しくすといへども、其主のはからひなりければ北殿にしはぶくを鼻びる迄にいひそしぬと。元結こく音、晝は日ぐらしに聞まじへて、又こと更の心地したりと。其角の清境破壞せらるゝ所、やがて都市問題を提げて立つべき機に臨めり。されど其角の目は耳は俗耳俗眼に非ず、彼は俳諧を見、俳諧を聞けり。彼はき

けり、くるくると卷とりたる車の絶間には百舌の尾ふりの聲、したり顔なる虻、蜂などの羽音にもかよひてけしからぬ音を。更に松風の吹なやめる折もあり、唐人鳳巾の雲に吼て春色をもよほす響もあるを。彼は見たり。工人共が破笠蓮に傾けて淀の河瀬の舟引あゆみするを。雨の日は、空しき車のみあるを見て。與惣右が門に誰を待つやらともうたひ出されき。彼はまた觀ずる所あり。元結を千筋八重に引はえて、夜もすがら露にうたせて、朝々にこきさらす笹蟹のたくみめく業は、車の前に光陰のうつりかはるを歎かずして夕を望む事の無常なるを。車の數三つ、彼直に擬するに法の車を以てす。三句あり。

文七にふまるな庭のかたつぶり

もと結のぬる間はかなし虫の聲

大絃はさらすとひにおつる雁

この句成りて、其角の胸裏、不滿なく、不平なく、また都市問題を論ずる要なし。

江戸時代の平民は、すべてに於て其角以上の壓迫を蒙りき。專制の政治と階級の制度世

襲制度とは、隨所に社會組織の缺陷を來して、まゝならぬ事どもの多かりき。彼等は凡夫のかなしさを、諦められぬにつけ、悟られぬにつけて、芭蕉樣とやら其角樣とやらの口眞似して、一句をものし、十七字に綴りなす。さても風雅とは淋しきもの、寒きもの、つれなきものといひつゝも、何となう風雅の道にたぢさはるおのが身も殊勝に思はれて、愈、俳諧宗匠の柴門を叩きぬ。江戸時代に於ける俳諧の隆盛は實にこれを專制治下の民衆の境遇と相關して、はじめて解すべし。

一四

以上の所見は、江戸人の火災に對する態度によりて更に顯證なるをおぼゆ。何となれば火の暴威は專制治者にまさる事數等なればなり。彼等はこゝにある運命觀を抱き、諦悟の觀念を具するに至れり。

江戸の地は武藏野の一角にあり、もとより風はげしくして、大火頻出す。明暦三年の如

き、江戸城をはじめ、萬石以上の大名屋敷五百、旗本七百七十、堂社三百五十、町屋四百片町八百、燒死者十萬七千四十六人を數へり。（武江年表） この慘劇に鑑みて、屋舍造營の制、道路使用の制、また火除地の制を發布して大火後の善後策を講じ、また新市街の美觀を計れり。されど、大火は愈々多く、災害の歴史は幾度かくりかへさる。識者夙にその設備と方法との宜しきを得て、民の患なからしめん事をいふも如何ともし難し。太田錦城が「梧窓漫筆拾遺」にいふ。

火災は天變にて天意のある事人力にて勝つべきには非れども、目黒行人坂より出火して千手の驛までにいたり、その半町より失火して河原に至るなど、太平の御世にて事すみたれども此後いかなる惡心のものあるまじとも量り難し。第一には御不要害の事なり。第二には御物入の費も夥しき事なり。第三には延燒士民の困窮難儀可憐の甚しき事なり。第四には火災の後風俗人情一變してあしくなる事なり。文化の火災より予が慥に見知りたる事數多の條あり、なるべくは人事を盡して火災のなき樣にする事

仁政の第一たるべし。

江戸の火災をいかにして防止すべきかは、爲政者のつねに念とする所なり。從つてこれに關する制令屢々出づ。慶安二年の町觸の一ケ條にいはく、

一、火事出來仕候共、荷物に構不レ申、火元の者方へ集り可レ申候。其町々家持并店持の者迄不レ殘駈集、成程情を出し、火を消可レ申候。若不二駈集一者候へば、後日に御穿鑿の上過料可二申付一候事。

寛文三年の町觸にいはく、

一、町中火事出來候節、向三町左右、裡町三町、火元の町共に合て九町、早速駈集り、火を可レ消。片町ならば左右二町、裡町三町、火元共に六町駈集り火を可レ消候。

制令頻りに出で、消防の組織また成る。定火消あり、大名火消あり。また町火消あり。されど、一度火に當るや、龍吐水以外に恃むべき器械なき當時は、たゞ膽力と腕力とを以てするのみ。江戸の泰平の時代は、武士にして武を競ふべき機會は、この際に過ぎず。定火

消、大名火消、各死力を盡して之を防ぎぬ。淺野内匠頭は年少氣鋭しかも勇敢の性情を以て大名火消中の上手なりき。火の急なる所に人數をあけ置き、下に長刀を拔身にて持ち、少しにても怯懦の態あらば手討にせんと擬し、或は衆の逡巡する時は身自ら屋根に登り、從ふ多人數の重さにて家を踏み潰すなどの離れ業をさへ敢てせり。もしそれ町火消に至りては、既に江戸の華の目あり。火中に身を投じて、灰燼となるを辭せざる任俠の風天下に喧傳す。されど、これ等の勇敢なる行爲を以てしても、火は早速に消しとめらるべきにあらず。江戸の市民數々家を燒かれ、燒かれずとも脅されぬ。火事馴れたりとは、また江戸子の誇なり。

安政元年七月七日、七夕の曉頃、本材木町より出火す。この時、家々の屋根毎に、五色の短冊結び下げたる竹の立てるが、幾萬となく見えたり。すは火事よといふ間もなく、火事場近くの數町内、その竹は影をかくして一本もなし。旅の人々は今更に江戸の衆のすばやきに驚けりといふ。かうまで、心すれど、なほ災厄を免れ難き時、彼等は天運として、

神妙にたゞ大自然の威力の下に屈するのみ。從つて彼等はとく諦めはてて、いつまでも、くよくよと物案ずる事なし。

寛文八年、二月一日より六日まで江戸中の火事あり。落首にいはく。

見渡せば柳原燒櫻田やお江戸は春のこじきなりけり。

されば、その三月上野の花盛なるよしをきゝたる將軍家綱はおもへらく、今年こそ、上野に人なく、花も色を失ひけんと。卽ち人を派して檢せしむ。その者かへり來りて報告す。花見の貴賤男女群集して、內幕外幕を打ならべて酒宴し、琴三味線にてざんざめくと。將軍これをきいて、今度の大火にて四民共に財寶を燒失したれば、たゞ困窮して花も見ずてあらんとおもひしを、例年にかはらずとは、江府未衰微せざる證左なりとて悅ぶ事大方ならざりき。

寺門靜軒は幕末の奇士なり、その著江戸繁昌記はまた一奇書なり。書中火場の一節あり。彼に從へば、江戸に火災の多きは、江戸の繁華なる證左なりと。言何ぞ家綱に類する。彼

いはく、

人家稠密、四里間の竈烟、無盧數百萬、油煎燭燒、一日薪炭の用ゐる所、泰山を童にし、鄧林を髡にす。要するに火は燥くに就くの數、何ぞ之を此に免れん。但思ふに都俗奢侈の致す所、亦或は有て、之に加ふるに人氣の輕脫を以てす。

彼はまづ奢侈の實を飲食についていふ。富豪侯の酒肉を用ゐ、料理屋侯の酒肉を賣る。煮焚の火氣從つて多く、燥いて火けざるを得ずといふにあり。彼更にいふ、

然も繁華地方の自然る所、この奢侈なくんば、又何を以てか、この繁華を見ん。この繁華にあらざるよりは、又何を以てか、この火を見ん。火か、火か、尤繁昌中の物ならずや。

いふ所、或は奇矯に失せん。されど火事なれ、やけ馴たる江戸の市民の耳には、けしうも響く事なからん。火事の後には、必ずいひはやらさるゝ落首の數々、さては落語の類を見ば、誰か靜軒の言を斥けん。

文化十二年正月元日、深川靈岸寺の本堂燒失す。江戸の市民は、この寺の壇家に諸大名諸旗本あるを知る、また靈岸住持といふ語呂の大願成就にかよふを知る。卽ち、一の諧謔を弄す。

この火事に、靈岸寺檀家の御旗本の歷々、馬乘にて御供廻り召つれられて、駈けつける。はや本堂に火移れり。殿、馬より下り、家來に仰せらる。其方共は、この塀の外に控へ居よ、我は位牌堂にいたり、御先祖の位牌を取り出さうと。この時地中の寺々一圓に火うつり勢猛なり。家來ども殿の身の上を案じ居たるに、殿うしろの塀をめりめりと切りやぶり、位牌を口にくわへ、片足グッと踏み出しなさる。家來の面々、聲を揃へて、お旦那首尾は。殿、れいがんぢうじかたづけねへ。

文政十二年三月の火事は、神田佐久間町の材木小屋より起りて、南北凡一里餘、東西二十餘町を燒き、燒死、溺死の輩、千九百餘人を數へたる大災なり。災後貧窮の者多く、つひに九ケ所に御救小屋を設けぬ。落首例によりて多し。その一を抜く。

水の出る和泉橋から燃出してたき付になる芝で消けり。

川柳多し、また一を抜く。

土左衞門名をあらためて火災門

笑話のうちよりまた一を抜く。

「今度の火事は寅年より大きいといへば、「寅より大きかの。「ウム寅より大きいとも。「そんなら象程であるか。

寅年の火とは、戊寅の年、文政の元年十月、淺草より中の鄕に飛火し、本所割下水より深川猿江の邊まで竪一里を燒ける大火をいふ。

無常も、悲運も罹災の幾訓練を經たる江戸の市民には、また諧謔可笑の資を供するに過ぎず。もしそれ細見に模したる「天人の五變著」の一書の如きに至りては、たゞ人をしてひた呆れに呆れしむ。その序の一節にいはく。

酒池肉林の榮耀のたのしみ、忽ち七珍財寶を燒失ひ、肉泥血盆の艱苦の歎き、つひ

に六親九族を溺れ死す。いづれ一つの變囚なるべく、いやな浮世をあらためさする。

天の敎と人悟れは風ものどけき四の海、世の太平を謠はざらめや。

災禍を轉じて太平の祥となす。これ祝ひなほしの悲哀とよりは、負けをしみの强味を語るものと見るべし。彼等は、案外暢氣なり、やけたらすぐに建てようまで、建てたら、すぐに燒けようまでと。これまけ惜しみか。されど、その底には、ある一種の諦悟の念の存するを知らざる可らず。幻住の念これなり。この一念偶以て、芭蕉の懷抱する所と相通ず。異るすぢは、一は積極に自求め、一は消極にやむなきに出づるにあるのみ。

芭蕉がおのがために粟津草庵修繕の擧あるを知るや、卽ちいはく、

兎角拙者浮雲無住の境涯大望故、かくの如く漂泊いたし候間、その心に叶ひ候やうに御取持賴み奉り候。必ずこれに繫がれ心をうつし過ぎざる樣の事などは如何やうとも御指圖忝なかるべく候。

うはうはしき江戸の都會生活も、この一事ありて、諸諧の中にいひしらぬ淋しさを寓し

これによりてさびの一面を味ふを得たるか。

芭蕉も亦火の難にあうて、幻住のおもひを體驗したり。芭蕉の生涯を語る者はいふ、この事ありて、芭蕉の風雅一入の色を添へたりと。其角は枯尾華に、斯うもしるしつ。天和の比ならんか、武江の草庵に急火の難にかこまれ、潮にひたる笘をかつきて、煙の中に生のひけむ。是ぞ玉の緒のはかなきはじめなるや。爰に猶如火宅の度をさとり、應無所住の心をはなちて、其次のとしは甲斐の山里に身をかくし云々と。これを芭蕉自の筆に照合せんか。かの北枝が火災にあひたる時なほ燒にけりされども花は散りすましの句作あるを哀しくも嬉しくもおぼえて、そのもとに遣したる文。

池魚の災承り、われも甲斐の山里にひきうつり、樣々の苦勞いたし候へば、御難儀のほど察し申候。されども、燒にけりの御秀作、かゝる時に臨み大丈夫感心、去來丈草も御作驚き申すばかりに候。名歌を命に代へたる古人も候へば、かゝる名句に御代へなされ候へば、さのみ惜しかるまじくと存候。

明和九年の大火に際し、横山町に住める雪中庵蓼太が、火の迫るがまゝに、白湯を入れたる藥鑵を片手に提げ、片手に文臺を抱へ持ちて、深川の要津寺中の草庵にのがれて、まづ句をしるす。

緋櫻をわすれて青き柳かな

これを發句として、見舞に來たる人々に句をよびて百韻を成し、終宵興じたりといふ。當時傳へて美談となし、ものにしるす事多し。これ或は、北枝にならひて、地下に芭蕉の讃辭を享けんとのさかしら業か。俳諧に遊ぶもの、まさにかくの如くあるべしとの傳授心よりなせるか。或は火事慣れ、燒慣れたる彼等の自然の行動か、遽に斷じ難し。

この火事に、連歌師昌周の家は辛うじて、火を免れたり。されど親族どもあまた家を燒け出されて來りしほどに、人のもとにいひやりたるざれ歌

大そうとうおほそん

もろともにあはれと思へやけのこる家より外にしるのみもなし

彼、もちつたへたる抱屋敷共のやけたるを思うて、句あり。

をしましなかねておもひの家さくら

靈堂散人の何人なるを知らずといへど、彼が文政十二年の大火の遭難を記する一節にいはく

明日は羽澤石河が家に在て花下の宴をなし、森々たる丘上に遊び、今日は佃島三崎の船に乘て、漫々たる風浪に火中の難を凌ぐ、人間の苦樂定なき事實にかなしみ覺てうとふの類なるべし。又筆とりて、

火櫻やきのふは夢の山櫻

三句共に、内想外形相似たり。一にこれ俳諧の因襲に出づ。しかも、江戸の俗俳の初心の徒もこの折に口を聞かせば、また同じ樣な句をなさん。斯樣なる句をなしては、少くとも悟り諦したる樣を扮ふらん。されば彼等より深く至れる蓼太の胸裏について、穿鑿するの要を見ず。然り、芭蕉の正風を變質せしめたる江戸の地も、江戸の人も、火災ありて、

こゝに芦蕉の衷情に接するを得たり。俳諧と江戸の衆とを繼ぐ緣の絲のもつれてとけぬ理はこゝにあり。單なる清閑の技のみにはあらざりき。

延享三年二月廿九日、火あり、八丁堀を燒く。加茂眞淵の家燒け、加藤枝直の家やけたり。二人の感慨今殘りて家集にあり。枝直の集「あづま歌」にいはく。

二月九日の夜、火に遇ひて、をとゝし十一月火にあひし後造れりし家を、又失ひければ、今は家もいとなまで、やけ殘りたるぬりごめに、しばし住みなんと思へど、千蔭が幼き心にいかにわびしと思ひなむと心一つを定めかねて、

かゝりける折につけても春の野の燒野のきゞす身をは思はず。

「加茂翁家集」にいふ。

昔より心つくして、かうがへつゝ物多く書そへたる書どものあれば、これをば藏にも入れじ、いかて便よからん所へわたしやりてむ、今は逃れいでなん時、從者の手毎に持たせむとかまへて、先その事をとり認むる程に、調度どもは心にもいれず、たゞ

藏の戸口にひちり、こぬりまかなはせて立いでぬ。程なく皆烟にこもりければ、源の簡かもとに行て夜をあかしぬ。なにばかりの家ならねば、なごりもさしもあらねど、また草の庵結はむまでは、人によりてあらんもくるしかるべし。

春の野のやけのゝ雲雀床をなみ烟のよそにまよひてそなく。

これ等の和歌を以て、蓼太だちの俳句と比較す。今更に俳諧といふものと、風雅といふものとが考へらるゝに非ずや。

元祿十一年、火あり、其角の家を燒く。貞享元年の京上り以來、一日も忘らぬ十五年の間の日記はあとかたもなく失ひぬ。彼勿論痛恨のおもひにたへざりけん。しかもいはく、幸なる哉、比喩品の火宅を悟り、人をやぶれりやの悲しみにかなひて一朝一夕の悔なき事にたはれぬと。されどおもひ出るまゝに冉錄したるを名づけて焦尾琴といふ。これ、蔡邕が竈よりやけたる桐をとり出て、あらたに一張の琴をつくりしに、焦けたる所、自龍尾の景になりぬるをとりて、名づけし故事による。其角、なほ戯れていふ。彼名琴にならはゞ、

人もあはれと清怨にたへて、かへつて稱美琴なるべくやと。しかもこれ、彼が本意にあらず。故にいはく、

燒のこる琴に恨みの柳かな。

この虚と實と相より相離るゝもの卽ち俳諧の興趣か。枝直、眞淵與る所なし。

江戸の火災防止策の如き、もし徹底的に考慮せば、異常の發達を遂げて、或は近代科學の上に立つ方法の曙を摩するものありけん。然もこれを妨げたるは、俳諧なり、少くとも俳諧と相通ずる精神の存在によるといふは、餘りに附會の言に過ぎたるか。更に言を進めて俳諧思想が、江戸の秩序ある都市經營を妨げたりといふは、つひに狂痴の言なるか。

一五

江戸の市街には全體を統一すべき中心なし。さる設計と意匠となし。勿論江戸城はその中央に厳存す。されどそは江戸の市民と直接の交渉なし。たゞ彼等はその城下に住するを

誇り、御膝元に居るを誇る。しかもこの誇以外、彼等に於て加ふる所なし。城の甍は高しといへど、市民生活の象徴にあらず、また中心を示すものに非ず。いはゞこれ江戸にて富士を仰いで、わがものめかすと同樣なるか。然るに江戸の市民は、治者の指定を待たず、その企畫を待たずして自ら市街の小中心を生み出せり。彼等の都會生活に卽する自然の歸趨なり。そは何ぞ、火除地の利用これなり。火災の恐しさは武士と町人とをわかたず、治者と被治者とを選ばず、故に治者は指示して空地をなす。蓋、空地を以て防火線を劃せんとするなり。被治者もとよりその效用を知る。されど彼等の日常生活は、何等の中心點を求めてやまざるが故に、この異常のものを、許されたる範圍内に於て、自己生活の中心に轉用せり。數多き火除地の中にて、最よくその義を顯はにしたるは兩國の火除地、卽ち兩國の廣小路なり。常設の建物は、その地の性質上許さるべき理由なけれども、淺草見附番所の向には床店並び立ち、朝の間には青物市となり、市終れば興行物は一齊にはじまる。生活必需品の供給の所と民衆の娯樂の界とを兼ねぬ。江戸の繁華を敍する者はかの一定制

限下に置かれたる遊廓と劇場とを除けば、必ずやまづ筆をこゝに起せり。浮世繪に描く所の雜踏の光景を見よ、中にも北齋の「隅田川兩岸一覽」の兩國橋の圖を見よ。黄表紙などに寫されたる說明を讀め。わけて六樹園が「都の手ぶり」中の兩國橋のくだりを讀め。更に簡にし要を摘めるものは、東都歲時記中の記事か。

大路には假屋を構へ、絙戲、撞戲、牽綵俺儡、獼猴扮戲、其餘山野の珍禽異邦の奇獸に至る迄、種々の觀物招牌をかゝげ嘖吶の聲かまびすく、演史、土弓、影戲笑語、篦頭舖、相工、術家の床、生果、石花菜など物として有らずといふ事なく、橋上の往來は肩摩踵蹠轟々然として雷の如し。

卽ちいふ、江戸の都市生活の光明はこの地にありと。

さはいへ、一度この廣小路が元來何の爲に存するかをおもへ。家燒け、財滅し、幾萬の生靈亡ぶといふ恐しきものゝ存在を豫想して設けられたる地にあらずや。光明の裏をかへして、都會生活の最呪ふべきものを、さし示すものにあらずや。まして人々が有頂天に浮

れぞめくかなたには、回向院の甍高く聳えたり。これを仰ぎ見る者、誰か明暦三年の悲慘をおもひ出さざる。それを思ひ出す以上、江戸の防火組織があまりに不備なるを思はずや。都會生活の不安をおもはずや。この廣小路の火除地は龍吐水と共に果して恃むに足るべきか。さらずば火浣布の採用か。そは餘りに夢幻の計畫なるを如何せん。

しかも當代の社會組織は、その位に非ずして、事を議するを許さず。故に深く考ふる者は默するのみ。默して燒けたる時の覺悟をなすのみ、幻住を念とするのみ。さりとてそれも氣づまりとならば薪下の火を忘れ、否忘れんと努めて深くもの考へざる者と共に悠々泰平を樂しむべきのみ。所謂都市計畫といふもの、遂にこの間に意義なし。彼等は懷手して、歡樂の地をのそり廻りてお江戸の氣分を心ゆくまで味ふべきのみ。

日盛や太刀の所謂を廣小路

廣小路の繁華をかく見るものは、同じ思を安永天明の頃を一しきり榮えたる中洲の上に寄せん。川岸に水茶屋行儀よく軒をつらね、料理屋跡先を押へて、船路陸路の客を留むる狀、

兩國さびれて、煮賣、煮肴、綿飴、玉子燒、胡麻揚、西瓜の立賣の家臺見世、芝居、見せ物、輕業、講釋の席相並びたる樣は「中洲雀」、「大抵御覽」すでに盡せり。されど浮れある く足とめて、おのが踏む所の土をおもへ。もと、三叉の河洲、年々に土地を積み來るを、明和八年の冬より埋め立てにとりかゝりぬ。されど大江の中に築く事とて、思ふにまかせざるほど、翌九年の大火あり。このもの幸して中洲はとみに成れり。卽ち踏むところの土はいたましき數十町の焦土なり。人々はこれを踏んで、復の災厄の來るを忘れてあり。否、忘れざるにあらず、故にしばらく樂しむなり。中洲雀の卷頭第一にいふ所は、火と死と異るあれど、歸着する所は同じ。

人間纔五十年、飲めや謠へや、一寸先は闇雲と古人の異見にまかせつゝ、我まだ勘平になるや、ならぬ其內にたはけをつくして、すかんぴんとなり云々

とにかくに、一切の災難をも、かれ等は、歡樂に飜譯するを忘れず。又歡樂の蔭に悲哀の潛むを見れば、またその悲哀を掬して樂しむすべを知る。これものを思ひしむる人々の

上なり。そのものゝあはれを、まづ眞向にふりかざすが俳諧師。そのものゝあはれを、滑稽にいひかへるが狂歌師なり。共に、この歡樂と悲哀との皮肉の間を縫ひもて行く。廣重は好んでひけ過ぎの吉原を描きなしつ。これ江戸の繁華の眞たゞ中に、田舍のわびしさを寫し出さんとするものなり。江戸の情調と、羈旅の情調とは、一つに混じて、彼が彩管より迸り出でたり。江戸の名所繪をかきなす彼は、また東海道五十三次をかきなす人なり。二者共に彼が感得したる佗しさの、淡き色彩となりて紙のおもてに現はるゝに於ては異る所なし。これなほ、江戸の都會生活の行き詰る所、洒落本の趣向の窮る所、種々の意味に於て田舍をひき入れたる文學の現象と一致す。廣重のわびしさと、芭蕉のさびとの間に契合するもの果して幾何ぞ。

芭蕉に背く所多しといへど、江戸の俳人も、なほさびをゆかしみ又尙ぶ。故に陋巷にありて、都會生活の忌むべき條件、たとへば狹隘、不潔等の中にあれど、なほ安住閑居の意あり。兎に角に心に花月を思ひ、胸に淸閑を樂しめばなり。當時の江戸は今よりも風致美

に於て、自然の背景の美に於て優るゝものを、更に彼等の俳眼は田園都市を髣髴として雜沓の中に見出で、露地裏の日の目も見ぬわびしさの中にさびを見出でぬ。

もしそれ露地裏俳人どもの會話を聞かんか。

格子「多ア賀物と義景が來て歌仙を一卷せめられて七ツ迄居た。今白髮をぬかせながら、とろとろやりかける所さ。何だか、この頃は俳諧で代が治る樣だ。今日は冬枯見といふ御趣向か、

歌艶「アイサ、太郎が所で鱈を出す自分、江戸のお鶴をつれて、何處のか見えやしたら、立て渡場へ來ると、よつざへ參つたとつて、利八と吉藏に逢つて、俄の咄をしながら川中へ押出すと、あゝなんとかいふ二軒目の二階で白い顏が大勢こつちを向て冨士の白雪朝日でとけるをうなつて居やす。まぶしくつて知れなんだが、揚つて見たりや、熊吉、梅を、筆じ、八十吉、おさよ、里の、八重といふ花やかな舞臺さ。けんばんの男をつれて、そゝり出たさうで、妙に意氣な男が來ると思つたりや、艶さんか

へ。まんざらでもございますまい。まあおあがんなさりといふ、爰でどんと呑やした。

格子「うゝ玉姫稻荷などお立寄、ウゝひねる。ひねる。

志路「もし淺茅が原は黑幕、忍三重若衆松葉をたいて居ようといふ場合だね。

向「旅人旅へといはしこい傾城もござりやすによ。」

路「一本四文が北狄蕃夷の世界を咄しやしよう。北狄とは深川をさす。（格子戲語）

彼等の俳眼は通眼と合し、又劇眼と混ず、俳の純粹を期し難きはその所なり。今これを逆に考へて、彼等が通に窮せず、劇に飽かで、永きを亘りしは、此の俳味の點ずる所にあり。見よ、彼等が茶番の趣向に困ずるや、世界を郊外のさびしきに移し風雅がるを。寛政の「格子戲語」はとく後の八笑人、和合人のゆき方を暗示せずや。斯くの如くして、俳諧の精神が、よしや曲解され誤解されたるにもせよ、否曲解誤解の大なれば大なる程、江戸の都會生活の安全瓣として、かの盲目的の愛と無意味の誇と合して、あのまゝの都會の形式を三百年に亘りて持續せしめたるなり。保健の上より見れば江戸といふ都市は夭折すべき

もの。しかも長壽を保ち得たるは、田園都市の形式をとればなり。但しその田園都市や、心の田園都市なり、俳諧都市なりといはんは不當の言か。

近代都市の問題としては當然起るべき貧民窟の悲慘の狀態をも、三馬などの筆を通じては如何に改善すべきを考へさせられずして、いかに笑ふべきかを考ふ。この事由に就てはいふべき事多し。されど今はたゞ俳諧の滑稽に繫る一筋についてのみいひ觸れてやまんとす。放蕩故に家にも棄てられたる若旦那の佗び住居は下水の穢さ、雨漏りのみじめさのみあるべきを、人情本の作者と、その挿繪の畫家を通じては瀟洒たる閑居、風流人の隱宅を偲ばするのみ。これまた俳諧の横流下行せるものか。

江戸文學と都會生活　終

大正十二年十二月二十日印刷
大正十三年一月五日發行

定價金六拾錢

著作者　山口剛
發行者　神田豐穗　東京市神田區表神保町十番地
印刷者　關根慶寛　市牛込區早稲田鶴巻町三六二
印刷所　早稲田印刷株式會社　東京市牛込區早稲田鶴巻町三六二

檢印
著者

江戸文學と都市生活

發行所　東京市神田區表神保町十番地　株式會社　春秋社　振替東京二四八六一番　電話神田二一三八番

眞言宗東寺派 濟世病院長・ドクトル小林參三郎著（發行後旬日にして忽五版）

生命の神秘

生きる力と醫術の合致

四六版函入美本
紙數三百三十頁
コロタイプ一葉
着色版一葉
凸版十數葉
定價金一圓九十錢
送料金十四錢

不治の難症に惱む者此新福音に聽け。科學を偏重し人間本具の生存力を無視せる現代醫學の缺陷を剔抉し、故岡田先生の遺業を繼ぎ、靜座法を醫術として、幾多の患者を救濟せしの新研究也。

▼本書の著者は永く英米獨にありて科學的醫術の蘊奥を極めたる人、嘗て自ら不治の難患に苦めるる時、一僧侶の法談を聽いて豁然大悟する所あり、幸にも偶々九死に一生を得て、生存力の秘密を躬自ら體驗し、茲に主客圓融、科學と宗教との合致したる醫界 Epoch-making の療法を發見したり。後年故岡田先生につき靜座法を修得して益々所信を確かめ、不治を宣せられし患者を再起せしめたる事數千人に及ぶ。而して衆望の歸する所、眞言宗東寺派の濟世病院に推されて長たる事十年也。

▼心身に憂ひ惱みある者、將に大手術を受けんとする者、不治の宣告を受けて生存の意義を見失へる者、生存力と醫術とを合致せしめ、靜座を基礎としたる新療法により、速に本書を一讀せよ。幾多不起の患者を全癒せしめし實驗談とその方法とは極めて平明に解說さる。

目次

總論、本論、（一）神經衰弱症、（二）暗示暗示感受自家暗示、（三）婦人科病、（四）慢性胃病、（五）心臟病、（六）思ひより身體に起る病、（七）肺結核、（八）近親者の看護は結果惡し、（九）腸の慢性疾患、（十）喘息、（十一）慢性腎臟病、（十二）蓄膿症、（十三）子宮筋腫、（十四）脫腸、（十五）夜尿症、（十六）子宮脫、（十七）痔瘻、結論、靜座法、

515
95

終